

凡例

一、本編は『浄土十勝論』の嘉永五年刊本（文久四年再版）を底本として、書き下し・出典注を施したものである。

一、書き下しに際し、字体は原則通用漢字に改めた。

一、書き下すにあたり、底本で判読できない箇所については、大正大学所蔵・寛文三年刊本（寛文本）を参照した。

一、原則、底本の返り点・送り仮名に依る。但し、底本の返点・送仮名が明らかに適当でないと考えられる場合は、校合本に従った。

一、難読語には振仮名にて読み方を記す。

一、難解語及び解説が必要と考えられる語句には脚注にて解説を付した。

一、適宜改行を施した。

一、適宜句読点中黒点を付す。

一、使用する括弧類に関しては左記の通り。

・「」…引用文
・『』…典籍名
・〔〕…割注
・【】…研究会補足

一、引用文は脚注にて出典を示した。引用文中の引用文についてはその限りではない。

◎書名の略称は左記の通り。

・『大正新修大藏経』…正藏
・『続大正新修大藏経』…続藏
・『卍字藏経』…卍藏
・『卍字統藏経』…卍統藏
・『大日本仏教全書』…日仏全
・『浄土宗全書』…浄全
・『続浄土宗全書』…続浄
・『大正大学総合佛教研究所年報』…綜佛年報
・石井教道編『昭和 new 修法然上人全集』…昭法全

浄土十勝箋節論卷上

卷第一章目

三学無分勝

初紙

浄土十勝箋節論卷上

乾上

菩薩大乘戒比丘澄円撰

南無阿弥陀仏

六字を安置する
義、多途を兼ね

三学無分勝 第一

夫れ戸羅木⁽¹⁾又は生死の愛河を絶^わたる堅牢の船筏なり。深禅高
 慧⁽²⁾は無明の長夜を照らす熾然の灯炬なり。然れば則ち若し三学
 全からざれば、二死⁽³⁾免れ難き者をや。又た設い三学を行はずと雖
 も、若し硬鱗鱗地⁽⁴⁾の猛威を具せずんば、更に煩惑を断ずべからず。
 亦た壁立千仞⁽⁵⁾の高徳を備えずんば、癡迷を除くべからず。古に
 云く、夫れ経律論の三蔵の文、中国に伝うる者五千余卷、其の詮
 する所の者は何ぞや。戒定慧のみなり。戒定慧を修して求むる者
 は何ぞや。円覚のみなり。原ぬれば夫れ生死を出過して菩提を証
 得するの道に難行有り、易行有り、自力有り、他力有り。其の自

(1) 戸羅木又：戸羅(戒)と波羅提木又(戒品)。比丘・比丘尼の守るべき戒律規定の体系。

(2) 深禅高慧：深い禅定と高尚な智慧。

(3) 二死：分段生死と变易生死の二種生死のこと(『綜佛年報』三三、一〇七頁、註一〇)。

(4) 硬鱗鱗地：硬剥剥地。何ものにも動揺しないこと。

(5) 壁立千仞：絶壁がそり立っているように、仏教で究める真理が高く険しい様子(『綜佛年報』三三、一〇頁、註六)。

力難行の道に従いて涅槃の域みやうに通入するの輩は、必ず三学を修して以て資糧と為す。其の他力易行の路に従いて淨利の境に往詣するの輩は、定んで十念を用いて以て生業と為す。若し三学具足して成仏せず、十念成就して往生せずと言わば、是の処ことわり有ること無かりけん。但だ一念の糧を舂ついて十万の宝刹(6)に適あくことは甚だ易く、万行の資を積みて二転(7)の高台に登ることは大いに難し。行者省察せよ。

先ず三学周備せずんば成仏すべからずと言うは、『首楞嚴經』に曰く、⁽⁸⁾

是の故に阿難、若し姪を断せずして禪定を修する者は、砂石を蒸して其れ飯を成さんと欲するが如し。百千劫を経るとも祇ただ熱砂と名づけけん。何を以ての故に。此れ飯は本、砂石の成るに非ざるが故に。汝、姪身を以て仏の妙果を求めば、縦い妙悟を得れども皆な是れ姪根なり。根本、姪を成ずれば、三途に輪転して必ず出づること能よわず上上。

又た『華嚴經』に云く、「戒は是れ無上菩提の本なり」と。『遺

(6) 宝刹：仏の国土。

(7) 二転：煩惱障と所知障を転じてこの上ない悟りを得ること（『綜佛年報』三四一〇三頁、註六四）。

(8) 『大仏頂如来密因修証了義諸菩薩萬行首楞嚴經』（以下、『首楞嚴經』（正藏一九・三二下）。

(9) 『大方広仏華嚴經』（以下、『六十華嚴』（正藏九四三三中）。

教経」に云く、⁽¹⁰⁾

汝等^{みんだち}比丘、我が滅後に於いて当に波羅提木叉を尊重し珍敬すること、闇に明に遇い、貧人の宝を得たるが如くなるべし。当に知るべし。此れは則ち是れ汝等が大師なり。若し我れ世に住するとも、此れに異なること無かりけん。^{至乃}戒は是れ正順解脱の本なるが故に波羅提木叉と名づく。此の戒に依因すれば、諸の禪定及び滅苦の智慧を生ずることを得。是の故に比丘、当に淨戒を持して毀せしむること勿るべし。若し人能く淨戒を持すれば、是れ則ち能く善法有り。若し淨戒無ければ、諸善の功德皆な生ずることを得ず。是れを以て当に知るべし。戒を第一安穩功德の所住処と為ることを。^{至乃}汝等比丘、若し心を摂する者は心則ち定に在り。故に能く世間生滅の法相を知る。是の故に汝等常に当に精進して諸定を修習すべし。若し定を得る者は心則ち散せず。譬えば水を惜めるの家は善く堤塘を治むるが如し。行者も亦た爾り。智慧水の爲の故に善く禪定を修して漏失せざらしむ。是れを名づけて定と爲す。汝等比丘、若し智慧有れば則ち貪著無し。常に自ら省察し

(10) 『仏垂般涅槃略説教識経』(以下、『遺教経』)(正蔵一・二・二一〇下、一一二上、一一二下)。

て失すること有らしめざれ。是れ則ち我が法中に於いて能く解脱を得べし。若し爾らざる者は既に道人⁽¹¹⁾に非ず。又た白衣⁽¹²⁾に非ず。名づくる所無かりけん。実智慧は則ち是れ老病死の海を度る堅牢の船なり。亦た是れ無明黒闇の大明灯なり。一切の病者の良薬なり。煩惱樹を伐るの利斧⁽¹³⁾なり。是の故に汝等、当に聞思修の慧を以て而も自ら増益すべし。若し人智慧の照有れば、是れ肉眼なりと雖も、而も是れ明見の人なり。是れを智慧と為す^{上。巳。}

『涅槃経』に云く、

到彼岸とは、煩惱の大河唯だ菩薩のみ有りて、六波羅蜜に因りて乃ち能く得度することを、煩惱の河に至りて戒定慧・解脱・解脱智見⁽¹⁵⁾、六波羅蜜、三十七品⁽¹⁶⁾を修して以て船筏と為して、此の義に乗ずるに依りて煩惱の河を度りて彼岸に到る^{上。巳。}

『梵網』の序に云く、「戒を持ち平地と為し、禅定を屋宅と為して能く智慧の光を生じて次第に明照なることを得⁽¹⁷⁾」^{上。巳。}『華嚴経』に云く、「忍辱の鎧、堅固にして禅定の弓の力強く、智慧の箭^やに至りて疾く諸の煩惱を摧破す⁽¹⁸⁾」と。『大論』に曰く、「万行を発

(11) 道人：出家修行者のこと。

(12) 白衣：世俗の人。修行僧が色のついた衣を着ていたのに対し、世俗人は白衣をまわっていたことによる。

(13) 聞思修慧：教えを聞いて得る智慧、思惟して得る智慧、実践修行して得る智慧のこと。

(14) 『涅槃経』（正蔵二・二五〇下）。

(15) 戒定慧解脱解脱智見：戒・定・慧の三つの因と解脱・解脱智見の二つの果を指す。解脱とは慧によって惑の繫縛を解いた境地。解脱智見とは自分が解脱したことを認める智慧のこと。

(16) 三十七品：悟りを得るための三十七種の修行法。

(17) 慧因『梵網経菩薩戒注』（正統蔵三・八五五上）。

(18) 『華嚴経』とあるが『華嚴経』内では確認できず。ただし後半部分は『大智度論』に「引禅定弓放智慧箭 破諸煩惱賊得解脱」（正蔵二五・二三三下）とある。

趣すること、戒を宗主と為す⁽¹⁹⁾と。『成論』に云く、「道品の楼観には戒を初級と為す」⁽²⁰⁾。南山の『戒疏』一に云く、⁽²¹⁾

然るに煩惑清め難し。要ず方便に由るをもつて三学を設けて用いて治の元と為ることを致す。故に『成論』に云く、「戒は賊を捉え、定は縛り、慧は殺すが如し」。三行相い困りて斯に須く摂濟すべし。

故に身口の事業動もすれば理と違す。若し先ず防がずして妄りに塵欲に随うときは、則ち心路躁擾して静定何か因らん。定既に修せずんば、諸の我倒に於て心に思択すること無けん。明慧自ら隠れ正に会するに由無し。故に初行の者務めて先ず戒を学ぶべし。非違を検策して三業清浄なれば正定正慧自然にして立ちなん。故に経に云く、「此の戒に依因して後の二を生ずることを得。此の戒無ければ諸善生ぜず」⁽²²⁾云々。⁽²³⁾『行宗記』に之れを受けて云く、

三学の次第理数必然なり。常模に乖越せば道を去ること全く遠し。煩は即ち昏濁、惑は謂く乱動、三毒の結使善財を

(19) 『大智度論』とあるが確認できず。ただし道宣『四分律軍繁補欠行事鈔』（正藏四〇四下）に同文あり。

(20) 『成実論』に「道品楼観以戒為柱」（正藏三二二・三五一上）とある。

(21) 道宣撰・元照述『四分律含注戒本疏行宗記』（正藏三九・七三上）。

(22) 躁擾：心さわがしくみだれる、いらだちさわぐこと。

(23) 典拠不明。『遺教経』に「依因比戒得生諸禪定及滅苦智慧。是故比丘。當持淨戒勿令犯。若人能持淨戒是則能有善法。若無淨戒諸善功德皆不得生是以当知。戒為第一」（正藏二二・一一一上）とある。

(24) 道宣撰・元照述『四分律含注戒本疏行宗記』（正藏三九・七三上）。

(25) 乖越常模：度を越えて背き違ふこと。

劫掠⁽²⁶⁾す。之れを喩うるに賊の如し。三行相因とは謂く次第にし

て生ず。斯れ須く摂濟とは謂く相い離るべからず。次の科に初

反頭とは、此れ戒無ければ則ち定慧を生ぜざることを明かす^上。

又た南山律徳の『帰敬儀』に云く、「三身を揖佩⁽²⁷⁾することは三学

に憑依すべし」と。又た云く、「元三学を立つることは同じく一

惑を傾けるを宗と為す」^{云云}。又た云く、⁽²⁸⁾

所行の三慧は是れ菩薩の道なり。弘誓の鎧を披き、精進の馬

を策^すめ、忍辱の弓を執り、智慧の箭^やを放ち、煩惱の賊を殺す。

直心・深心決定して、正しく無上第一平等の正道に赴く^{云云}。

『大日經疏』第一に云く、

阿羅訶とは、阿羅は是れ煩惱、訶は是れ害の義・除の義なり。

『釈論』には之れを殺賊と謂う。仏は忍進の鎧甲を以て持戒の

馬に乗り、定の弓、慧の箭^やをもち、外には魔王の軍を破し、内

には煩惱の賊を滅す^上。

亦た云く、⁽³¹⁾

行人般若波羅蜜を学すと雖も若し禪定無ければ、猶おし盲者

(26) 劫掠：おどして奪い取ること。

(27) 揖佩：「揖」は胸に手をつけて拝する等の意。「佩」はたずさえる、心にとどめるの意。ここでは敬って心にとどめるの意か。

(28) 道宣『釈門帰敬儀』（正藏四五・八五六中）。

(29) 道宣『釈門帰敬儀』（正藏四五・八六四下）。

(30) 善無畏説・一行記『大毘盧遮那成仏經疏』（以下、『大日經疏』（正藏）三九・五八四下）。

(31) 善無畏説・一行記『大日經流』（正藏三九・五八二中）。

の日光に遇うと雖も能く為す所無きが如し^{上巳}。

亦た同疏第五に云く、⁽³²⁾

若し真言の行人、髮の如くの淨戒を曉^{さと}らざれば、則ち口に真言を誦し、身に密印を持し、心本尊の三昧に住して、具さに次第儀式を修し、諸尊を供養したてまつると雖も、猶お諸法を造作すと名づく。未だ我人の網を離れず。云何んが菩提薩埵と名づくることを得んや^{上巳}。

『大日經』六に云く、「唯だ慧をもつて無明を害して自性言説を離る⁽³³⁾」と。『大論』第二に云く、⁽³⁴⁾

仏は忍を以て鎧と為し、精進を鋼鉀と為し、持戒もて大馬と為し、禪定もて良弓と為し、智慧もて好箭と為し、外には魔王の軍を破し、内には煩惱の賊を滅す。是れを阿羅呵と名づく^{上巳}。

『秘鍵』に云く、「無辺の生死何んが能く断つ。唯だ禪那と正思惟のみ有り⁽³⁵⁾」^{上巳}。『大日經疏』五に云く、「三世無礙智の調伏の牙を以て、諸の煩惱を噬^{かま}しめ竟んぬ⁽³⁶⁾」と。又た『大日經』七に云く、「其の光普く明淨にして能く無明の害を破す⁽³⁷⁾」と。『大日經疏』二十

(32) 善無畏説・一行記『大日經疏』（正蔵三九・六二九下）。

(33) 『大日經』（正蔵一八・四二下）。

(34) 『大智度論』（正蔵二五・七一中）。

(35) 空海『般若心經秘鍵』（正蔵五七・二一上）。

(36) 善無畏説・一行記『大日經除』（正蔵三九・六二六中）。

(37) 『大日經』（正蔵一八・五二上）。

に云く、「淨菩提心の平等慧の利刃をもて無始無明の根を断ちて、即ち菩提の正位に入るが故に」⁽³⁸⁾と。『大方等大集經』⁽³⁹⁾に云く、

不昉菩薩仏に白して言く、世尊菩薩摩訶薩^{至乃}能く戒聞慧等に於いて障礙する所無く、慈悲を修習すること猶おし虚空の如し。慧眼無量なること猶おし帝釈の如し。心に自在を得ること自在天の如し。正法をもて世を化すること転輪王の如し。大福德を聚むること須弥山の如し。善に於いて厭うこと無く、衆珍宝を聚むること猶おし大海の如し。十二因縁の深義を思惟すること亦た復た是の如し。畏懼^くする所無きこと師子王の如し。善法の財を具すること猶おし商主の如し。一切の依止すること大医王の如し。能く光明を作すこと猶おし庭燎⁽⁴⁰⁾の如し。闇を破ること日の如し。清涼なること月の如し。煩惱の汚^{よじ}さざること猶おし蓮華の如し。一切諸仏の妙法を具足すること猶おし満月の如し^{上巳}。

若し不昉菩薩の言うが如くならば鵝鴨浪に遊ばんか。若し是れに反せば雉然水に溺れんか。

(38) 善無長説・一行記『大日經』、『正藏』三九七八上。

(39) 『大方等大集經』(正藏一三・四〇上〜四一上)。

(40) 庭燎：かがり火のこと。

第二祖綽公禪師云く、⁽⁴¹⁾

又復た一切衆生都で自ら量らず。若し大乘に抛らば真如実相
第一義空、曾て未だ心に措かず。若し小乗を論ずれば見修道
に修入し、乃至、那合・羅漢に五下を断じ五上を除く。道俗を
問うこと無く未だ其の分有らず。縦い人天の果報有れども、皆
な五戒十善の為に能く此の報を招く。然るに持ち得る者は甚だ
希なり。若し起惡造罪を論ずれば、何ぞ暴風駛雨に異ならん。
是れを以て諸仏の大慈、勸めて浄土に歸せしむ^上。

畜^ただ教内の聖道の三学を修せざれば、二死を離れざるのみに匪
ず。教外の別伝の授受も亦た戒定に非ざれば、透徹を得ざるのみ。
請い問うて曰く、且く『六祖壇經』上に云く、⁽⁴⁴⁾

三に時衆の為に定慧の門を説く。師、衆に示して云く、善知識、
我れ此の法門は定慧を以て本と為す。大衆迷いて定慧は別なりと
言うこと勿れ。定慧は一体にして是れ二に不ず。定は是れ慧の体、
慧は是れ定の用なり。慧に即するの時は定、慧に在り。定に即す
るの時は慧、定に在り。若し此の義を識らば、即ち是れ定慧等し

(41) 道綽『安樂集』（「正藏」四七・二三下）。

(42) 五下：五下分結のこと。欲界に衆生を結縛する①欲食②瞋恚③有身見④戒禁取見⑤疑の五種の煩惱。

(43) 五上：五上分結のこと。色界と無色界とに衆生を結する①色食②無色食③掉挙④慢⑤無明の五種の煩惱

(44) 宗宝編「六祖大師法寶壇經」（「正藏」四八・三五二下～三五三上）。

く学すべし。諸の学道の人、言うこと莫れ。定を先にして慧を発し、慧を先にして定を発し、各別なりと此の見を作す者は法に二相有るべし。口に善語を説いて心中不善なれば、空しく定慧有りて定慧等しからず。若し心口俱に善に内外一種ならば、定慧即ち等しからん。自悟の修行は諍に在らざれ。若し先後を諍わば即ち迷人に同じ。勝負を断たずして却て我法を増し、四相を離れざらん。善知識、定慧、猶お如何が等しき。猶お灯光の如し。灯有れば即ち光り、灯無ければ即ち暗し。灯は是れ光の体、光は是れ灯の用なり。名、二有りと雖も体、本と同一なり。此の定慧の法も亦復た是の如し。又た云く、善知識、一行三昧とは一切処に於て行住坐臥、常に一の直心を行ずる是れなり。『浄名経』に云えるが如し。「直心は是れ道場、直心は是れ浄土」と。心に謡曲とうきょくを行じて、口に但だ直を説き、口に一行三昧を説いて直心を行ぜざること莫れ。但だ直心を行じて一切法に於て執著有ること勿れ。迷人は法相に著して一行三昧を執す。直に坐して動ぜず。妄りに心を起こさざる、即ち是れ一行三昧なりと言う。此の解を作す者は

即ち無情に同じ。却て是れ障道の因縁なり。善知識、道に須らく通流すべし。何を以てか却て滞らん。心、法に住せざれば道即ち通流す。心、若し法に住すれば名づけて自縛と為す。若し坐して動ぜずと言わば、是れ只だ舍利弗の林中に宴坐して、却て維摩詰に呵せらるるが如し。善知識、又た人有りて坐せしめて、心を見、静を觀、動ぜずして起たたざらしめて此れより功を置く。迷人会せず。便ち執して頭を成ず。此の如き者衆ひとおほし。是の如きは相の教なり。故に知んぬ、大いに錯あやまることを。

又た同下に云く、

世人、尽ことごとく言く、南能・北秀(46)、未だ事由を知らず。且つ秀大師は荊南当陽県の玉泉寺(47)に在りて住し、能大師は韶州の城東四十五里の曹溪山(48)に在りて住す。法は本と一宗なれども、人に南北有り。何をか頓漸と名づく。法は即ち一種なれども、見に遅疾有り。法に頓漸無けれども、人に利鈍有り。故に頓漸と名づく。秀聞きく、能師の説法は徑疾にして直ちに性を指すと。遂に門人志誠(49)に命じて曰く、汝、聰明多智なり。吾が与たもに曹溪

(45) 宗宝編『六祖大師法宝壇經』（『正嚴』四八・三五八中）の取意文。

(46) 南能北秀・六祖大師慧能（六三八～七二三年）と大通禪師神秀（六〇六？～七〇六年）のこと。慧能の法系は南方に広まったため南宗禪と呼ばれ、神秀の法系は北方に広まったため北宗禪と呼ばれた。また、南宗は頓悟禪を主張して、北宗を海悟禪と批判した。

(47) 玉泉寺：天台大師智顛が建立した寺院（湖北省当陽県）で、国清寺とならんで中国天台弘法の拠点であった。

(48) 曹溪山：中国禪宗六祖慧能が住した寺院で、曹溪山の宝林寺（広東省韶關市）のこと。

(49) 志誠：生没年不詳。もと神秀の弟子で、慧能の見解を探るために使われたが、かえって慧能に説法されて、後にその十大弟子のひとりになったという。

山に到りて、礼拝し、但坐聽法すべし。吾れ汝をして来たらしむと言ふこと莫れ。汝、若し聴き得たらば、心を尽くして記取して却り来たり訖れ。吾れ彼の所見を看ん。誰が遅き、誰が疾きと。火急に早く来たれ。吾れをして怪しましむること勿れ。志誠、命を稟けて曹溪に至りて衆に隨いて參請す。来処を言わず。時に祖師、衆に告げて曰く、今、盜法の人有り。潜かに此の会に在りと。志誠、即ち出でて礼拝して云く云云。弟子、秀大師の処に在りて学道九年、契悟を得ず。今、和尚の一たび説きたもうを聞いて、忽然として悟解し、便ち本心に契う。和尚、大慈なり。弟子、生死事大なり。又た輪廻を恐る。願わくは当に教示すべし。師曰く、汝玉泉寺従り来る、応に是れ細作さいさく⁽⁵⁰⁾なるべし。對えて曰く、不是なり。師曰く、何ぞ不是なることを得ん。對えて曰く、未説は即ち是、説了は不是なり。師曰く、煩惱菩提亦復た是の如しと。師、志誠に問うて曰く、吾れ聞く、汝が禪師、学人を教示して唯だ戒定慧を伝う。未審いぶかし、汝が師説の戒定慧の行相、如何。吾が与ために説け。看みん。志誠曰く、秀和尚説かく。諸惡莫作(51)を名

(50) 細作：問者のこと。相手の様子を探る者
諸惡眞作：七仏通戒偈「諸惡眞作、諸（衆）善奉行、自淨其意、是諸仏教」の一節。

釈迦と過去七仏が共通して受持したとされる教えを示した傷。禪宗において重んぜられ、道元は『正法眼蔵』（正藏八二・四二上〜四五中）において解説を加えている。

づけて戒と為し、諸善奉行を名づけて慧と為し、自浄其意を名づけて定と為す。此れは是れ戒定慧、彼の説、此の如し。未審、和尚の所見、如何。願わくは為に解説せよ。師曰く、秀和尚の所見、実に不可思議なり。吾が所見の戒定慧は又た別なりと。志誠、和尚に啓す。戒定慧は只だ一種なるべし。如何ぞ更に別なる。師曰く、汝が師の戒定慧は大乗の人を接す。吾が戒定慧は最上乘の人を接す。悟解不同にして見に遅疾有り。汝、吾が説を聴け。彼と同じきや否や。吾が所説の法は自性を離れざるなり。体を離れて説法するを名づけて相説と為す。自性常に迷う。須く知るべし。一切の方法は皆な自性従り用を起こす。是れ真の戒定慧等の法なり。常に自性を見る。自心即ち是れ自性等の仏なり。吾が心地は自性戒に非ざること無し。心地、癡無きは自性慧なり。心地、乱ること無きは自性定なり。汝が師の戒定慧は小根の智人を勧め、吾が戒定慧は大根の智人を勧めむ文等と。

又た『景德伝灯』第七に云く、⁽⁵²⁾

(52) 『景德伝灯録』（正蔵五一・二五五上）中。景德伝灯録研究会編『景德伝灯録』三（禅文化研究所、一九九三）参照。なお嘉永版本文には「第十」とあるが、ここでは寛文版に基づき「第七」とした。

京兆興善寺の惟寛いみかん禪師は衢州信安の人なり。至乃元和四年、
憲宗(54)詔みことりして闕下に至らしむ。白居易(55)、嘗て師に詣して問う
て曰く、既に禪師と曰う。何を以てか説法する。師曰く、無上
菩提は身に被るを律と為し、口に説くを法と為し、心に行ずる
を禪と為す。応用は三なれども其の致むねは一なり。譬えば江湖淮
漢の処に在りて名を立つるが如し。名、一ならずと雖も水性は
無二なり。律は即ち是れ法、法は禪を離れず。云何ぞ中に於て
妄りに分別を起こさんと。又た問う、既に分別無くんば何を以
てか心を修せん。師云く、心、本と損傷無し。云何が修理を要
せん。垢と浄とを論ずること無かれ。一切念を起こすこと勿れ。
又た問う、垢は即ち不可念なり。浄、無念ならば可ならんか。
師曰く、人の眼睛の上に一物として住とどむべからざるが如し。金
屑は珍宝なりと雖も眼に在りては亦た病と為る。又た問う、無
修無念、又た何ぞ凡夫に異ならんや。師曰く、凡夫は無明、二
乗は執著、此の二病を離るる、是れを真修と曰う。真修とは勤
むることを得ず、忘るることを得ず。勤は即ち執著に近し、忘

(53) 性實禪師：七五五～八一七年。伝記が白

居易「西京興善寺伝法堂碑名并序」、『宋高僧伝』巻一〇、『聯灯会灯』巻五などに所収されている。弟子に白居易がいる。

(54) 憲宗：唐朝第十四代皇帝（在位八〇六～八二〇年）。

(55) 白居易：七七二～八四六年。唐中期の詩人。字は楽天。日本の平安朝文学に大きな影響を与えた。また多くの僧侶との交流があつたとされる。

は即ち無明に落つ。此れを心要と為すと。爾か云し上り已む。

同第五(56)に云く、

韶州の法海(57)禪師は曲江の人なり。初め六祖(58)に見まひみて問うて曰く、即心即仏、願わくは指喩を垂れよと。祖曰く、前念の不生は即心、後念の不滅は即仏、一切の相を成ずるは即心、一切の相を離るるは即仏なり。吾れ若し具さに説かば、劫を窮むとも尽くさず。吾が偈を聴け。曰く、即心を慧と名づく。即仏は乃ち定、定慧等しく持すれば意中清浄なり。此の法門を悟ることは汝が習性に由る。本と無生を用いて双なべ修すれば是れ正なり。法海信受して偈を以て讚じて曰く、即心、元と是れ仏なり。悟らずして自ら屈す。我れ定意の因を知りて双修すれば諸物を

離る。『遺経』に云く「門人法海は即ち禪師是れなり」。

又た云く、

吉州の志誠(61)禪師は吉州大和の人なり。至乃師(60)曰く、未審、大師、何の法を以てか人に誨おゆる。祖曰く、吾れ若し法有りて人の与ためにすと言わば、即ち汝たふらを誑たかすと為す。但し且しく方はらに随

(56) 『景德伝灯録』（正蔵五二・三三七上）中。

(57) 法海禪師：慧能の弟子の一人。慧能の『六祖壇経』を最初に編纂したとされる。

(58) 六祖：中国禅宗の第六祖、慧能を指す。

(59) 『景德伝灯録』（正蔵五二・三三七中）。

(60) 師：嘉永本・寛文本ともに傍注に「志誠也」とある。

(61) 大師：嘉永本・寛文本ともに傍注に「六祖也」とある。

いて縛を解くを仮の三昧と名づく。吾が偈を聴け。曰く、一切無心なる自性の戒なり。一切無礙なる自性の慧なり。不増不退は自^{おの}ずから金剛なり。身去り身来るは本の三昧なり^{上巳}。

又た永明智覚禪師の『万善同帰集』第二に云く、⁽⁶²⁾

問うて曰く、『首楞嚴經』に云く「持犯は但だ身を束ねて非身は所束無し」。『法句經』に云く「戒性は虚空の如し、持つ者は迷倒と為す」。何ぞ苦^{ねんじ}ろに堅く事相を執して念を局し身を拘せん。奚^{なん}ぞ放曠機縦横せずして虚懷履道せん。答う、此れは執情を破して、戒徳を祛^{しりぞ}くには非ず。若し自持他犯を見れば、譏毀^{きき}の心を起こさん。戒を防非と為す。防に困りて過を増さば、斯の如きの類、実に迷倒と為す。^{至乃}持犯の二辺に著せざる、是れ真の持戒なり。『大般若經』に云く「持戒の比丘天堂に昇らず、破戒の比丘地獄に墮せず。何を以ての故に。法界の中には持犯無きが故に」。此れ亦た著を破して諸法の空を了^{さと}る。事理^{なご}双べ持ち身心俱に淨し。又た若し縦横自在を論ぜば、唯だ仏一人のみ淨戒を持つ。其の余は皆な破戒の者と名づく。帶習すら尚お

(62) 永明延寿『万善同帰集』（正藏四八・九六五上）。

境に牽かれて現行す。豈に縁縛を逃れんや。三業護り難く放
 逸根深し。猶お酔象の鉤無く、癡猿の樹を得て奔波して乍ち擁
 し生鳥の籠を被るがごとし。若し定水・戒香・慧炬無くんば、
 照寂に由無し。至乃又た今の如きは末代なり。宗門の中に大乘を学
 するの人、多く戒律を軽んじて、是れ小行を執持すと称して、
 戒急(63)を失す。所以に『大涅槃經』に、仏涅槃に臨む時、扶律談
 常(64)したもう。則ち乘成俱に急なり上已。

又た真歇(65)の清了(66)禪師曰く、
 一等刻核の徒、口頭の禪(67)を学びて售売(68)して、其の舌を簧巧(69)
 にして人を惑わしめて調く、「酒肉すれども菩提を礙えず。色
 慾すれども般若を妨ぐる(70)こと無し」として、因果を撥無(71)す。一
 盲は衆を引く、豈に反りて学道の君子の重害を貽(72)さざらんや。至乃
 寿(73)禪師、藏教に依りて数条を録出す。調く「殺生を戒めざれば
 菩提の種を断じ、食肉を戒めざれば慈悲の種を断じ、色欲を戒
 めざれば清淨の種を断じ、飲酒を戒めざれば智慧の種を断ず」。
 斯れ明条なり。豈に虚ならんや。更に能く貪瞋の二事を戒め得

(63) 戒急：戒を嚴肅に持つことを最優先する
こと。

(64) 扶律談常：戒律をたすけ、仏性が常住で
あることを説く教義。

(65) 真歇清了禪師：清了（一〇八八―一一五一
年）。号は真歇。左綿安昌（現在の四川省）
の人。丹霞山の子淳の法を嗣ぎ、宋代曹
洞宗において重んじられた。

(66) 典拠不明。『真歇清了禪師語録』（『新大日
本統藏經』七二）には記載なし。

(67) 口頭禪：悟りも実践も伴わない口先だけ
の禪のこと。

(68) 售売：売ること。

(69) 簧巧：簧はリードのこと。巧舌如簧（言葉
巧みにまくし立てるの意）の略。

(70) 撥無：払いのけてじないこと。

(71) 寿禪師：永明延寿のこと。

れば、端謹一如なり^上。

夫れ六灯⁽⁷²⁾の文言を按じて、禪者の行相を明らかなるに、或いは二五・六八の大戒を持ちて、以て夙夜に工夫する有り。或いは十具の小律⁽⁷³⁾を守りて、以て四時に坐禪する有り。此れ等は皆な戒定慧の業を修勤するの相なるのみ。抑宗門授受⁽⁷⁴⁾の三学、大いに教内の所談に異なりと難も、猶お未だ三学の闡内⁽⁷⁴⁾を出でず。宗説俱通の人、指を此ここに染めて之れを知れ。然るに世に多く唾羊の荒僧有りて、旬⁽⁷⁵⁾て曰く「直指人心⁽⁷⁵⁾の手段には、戒定とも言わず。教外別伝⁽⁷⁶⁾の宗旨には、深慧とも言わず。上乘尸羅の明珠⁽⁷⁶⁾を抛ちて、不有不空の心印を編す⁽⁷⁶⁾」。此れは是れ禪門の蝙蝠⁽⁷⁶⁾なり。亦た即ち仏心の蠱毒⁽⁷⁶⁾なり。慎まざればあるべからず。嗚呼、左言⁽⁷⁷⁾うも十万八千、右言⁽⁷⁷⁾うも十万八千、只だ悟を以て、以て訣と為す。夫れ意⁽⁷⁷⁾れば在世正法の昔は、大悟透徹の禪者も有り。亦た直達法界の教人も有りと雖も、尚お是れ理深解微なるが故に、未だ難解難入の失を免れず。当今末法の代に於ては、一切衆生、更に行慧証理の有ること無し。間依⁽⁷⁷⁾学すること有るも、唯だ是れ信種のみ。若し無漏の三学を具足せずんば、芥城⁽⁷⁷⁾竭

(72) 六灯：延寿が明示する殺生、食肉、色欲、飲酒、貪り、瞋りの六つの戒め。

(73) 十具小律：在家の十戒と出家の具足戒という上座部の戒律のこと。

(74) 闡内：門の敷居の内側のこと。

(75) 直指人心：自己の心を凝視して、仏心・仏性を把握すること。

(76) 教外別伝：悟りとは言葉や文字によるものではなく、直に心へと伝えるものであるということ。

(77) 茶城：一由旬四方もある大城のこと。

て、還りて満ち、劫石(78)磷つすらぎて復た生ずとも、更に三妄の惑障を離れて、二転の期を得る者有るべからず。

問うて曰く、従上所談の文理を視聴するに、即ち悲喜(79)交流しんじょうれ、紅涙しほしほ数行つちなる。其の喜き怡いと云うは、三学の妙行(80)を運めぐして、二死の愛河を絶すなり。厥の悲恨と言いは、五蓋(81)覆おほい易く三学行ぎやうじ難ければなり。夫れ三畏途の火坑、足下に在り。一命の葉、地に落ちなば、墮お在あせんこと必せり。恐懼(82)且干しよせん、惶怖万端(83)なり。宛も竜鬚りゆうしゆを摩なでて虎尾を履むが如く、亦た深淵に臨み薄水を踏むに似たり。之れを奈何が為ん、之れを奈何が為ん。倩(84)以もつれば世は是れ第三末法の時分、処は廻ち第三離車(85)の辺域なり。時、澆季に曼ながして五濁乱漫たり。人、魯鈍(86)に為りて十惡(87)恣ほしに作ませり。三毒の意馬、八荒(88)に馳かす。故に刹那三昧をも得ず。七支(89)の疲猿、万境に移転す。故に一品の尸羅をも張らず。若し爾らば、胡なんに縁ゆりてか二十五有の縲るい純(90)の中を出でて、三藐三菩提の道場の座に坐することを得んや。伏して乞こう、今正しく解脱の要道を授けて、以て愛河の根源を絶たんことを。

答えて曰く、快く此の事を問えり。出離生死の良縁、往到彼

(78) 劫石：一由旬四方もある大磐石のこと。

(79) 喜怡：よろこぶさま。

(80) 五蓋：心を覆う五つの煩惱（食欲、瞋恚、憍沈睡眠、掉挙悪作、疑）のこと。

(81) 恐懼且干：恐れが限りのないさま。

(82) 離車：古代インドの部族、リッチャビ族のこと。

(83) 八荒：国の果て、国の隅々のこと。

(84) 七支：身に三つ、口に四つの悪業のこと。

(85) 縲繼：罪人として捕われること。

岸の開津、斯の温なすねにまさ加れること無し。夫れ三学式内の断証の外に、亦た別に一路格外の行門有り。其の緯こと、六合の内を離れ、厥の談、耳目の表に出でたり。所以に軋すなわち之れを信知し難し。螻蛄しよつめい・斥鴳せきあんは金翅こんし・巨鵬こじんの翼を見ず。蝮蛇えんてい・蝦蟆がまは難跋なんぱく・沙竭さかの鱗を知らざるの謂いなる者をや。若し式内の情量を提さげて格外の玄旨を測らば、百非も非に非ず。千是も是に非ず。是非の談、足断えて止み、詳勘の量、手亡して住とどまるべし。然れば則ち直ちに師曠しきやう・伶倫れいりんの際耳を開きて以て諦かに之れを聴け。正しく仲尼ちゆうに・顔淵げんえんの愍心を借りて以て善く之れを思え。今正しく堅牢の法船を与えて以て八苦の愛瀾らんを絶わたさん。夫れ吾が弥陀如去、法蔵索多の古、極愛一子地ごくあいいつしじに住し、平等無偏の大慈大悲に催されて、普く三学分外の一切菜生を摂益せんが為に、巧みに十念往生の別願を發起したもう。所謂る其の殊勝本願の文に云く、

設し我れ仏を得たらんに十方の衆生、至心に信樂して我が国に生ぜんと欲して乃至十念せんに、若し生ぜずんば正覺を取らじ。

(86) 螻蛄：蚊のまつげに巢をつくるという想像上の子虫のこと。

(87) 斥鴳：小鳥の名。ミンサザイの類。

(88) 金翅：迦楼羅のこと。翼は金色、頭には如意珠があり、常に口から火焰を吐く。天竜八部衆の一つとして仏法の守護神とされる。

(89) 巨鵬：想像上の大鳥の名。

(90) 蝮蛇：トカゲのこと。

(91) 難跋：八大竜王の難陀と跋難陀のこと。この二王は兄弟である。

(92) 沙竭：八大竜王の娑伽羅のこと。難陀と跋難陀の兄弟と争ったことがあった。

(93) 師曠：春秋時代、晋の国の楽師。盲目であつたが琴の名手。

(94) 伶倫：黄帝の臣下で音楽を司つた人物。

(95) 仲尼：孔子の字。

(96) 顔淵：春秋末期の魯の賢人。孔門十哲の首位。

(97) 極愛一子地：初地の別名。良忠『決疑鈔裏書』(浄全七・三五下)等参照。

(98) 『無量寿経』(浄全一・七)。

高祖大師之れを受けて、別意本誓の元意を詳勘して云く、⁽⁹⁹⁾

若し我れ成仏せんに十方の衆生、我が名号を称して下十声に至るまで若し生ぜずんば正覚を取らじ。

彼の仏、今現に世に在^{ましま}して成仏したまえり。当に知るべし。

本誓の重願虚しからず。衆生称念すれば必ず往生を得^上。

夫れ伏儀^{ふつき}は八卦^{はつげ}を造り、神農^{しんろう}は五穀^{ごこく}を造り、貨狄^{かてき}は舟^{ふね}を造り

黄帝^{わうてい}の、⁽¹⁰⁰⁾ 維文^{いぶん}は杵臼^{きうく}を造り^{臣なり}、蚩尤^{しゅうゆう}は兵^{へい}を造り^{炎帝の時、臣なり}、黄帝^{わうてい}は冠

冕^{みん}を造り、⁽¹⁰¹⁾ 容成^{ようせい}は曆^{れき}を造り^{臣なり}、岐伯^{ぎはく}は医^いを造り^{黄帝の時、臣なり}、隸道^{れいどう}は

数^{すう}を造り^{黄帝の、臣なり}、皐陶^{こうとう}は獄^{ごく}を造り^{舜の時、臣なり}、咎仲^{けいちゆう}は車^{くるま}を造り、⁽¹⁰²⁾ 伯益^{はくえき}は井

を造り、⁽¹⁰³⁾ 蒙恬^{もうてん}は筆^{ひつ}を造り、⁽¹⁰⁴⁾ 禁倫^{さいりん}は紙^しを造り、吾が弥陀世尊は始めて

善導^{ぜんどう}『往生礼讃』(浄全四・三七六上)。

伏儀^{ふつき}：古代中国神話に登場する伝説上の帝王である三皇の一人。中華民族の始祖ともいわれる。

八卦^{はつげ}：古代中国から伝わる『易経』(占いの書)における八つの基本図像。乾、坎、艮、巽、離、震、坤、兌の八つ。

神農^{しんろう}：三皇の一人、炎帝ともいわれる。医薬と農耕の術を民に教えた。

貨狄^{かてき}：黄帝の家臣。共鼓とともに初めて舟を作ったという。

炎帝^{えんてい}：三皇の一人。神農(炎帝)の子孫を破り、蚩尤を倒して天下を統一。養蚕・舟車・文字・音律・医学・算数などを制

定したといわれる。

(105) 維文^{いぶん}：黄帝の家臣。詳細は不明。

(106) 蚩尤^{しゅうゆう}：神農の家臣。乱を起し黄帝と戦って敗れた。

(107) 冠冕^{かんべん}：冕板をつけた冠。

(108) 容成^{ようせい}：黄帝の家臣。曆を作り、歳時を明らかにした。

(109) 岐伯^{ぎはく}：黄帝の家臣。黄帝とともに中国医学の始祖とされる。

(110) 隸道^{れいどう}：黄帝の家臣。恐らくは隸首の誤り。算数を作って物事の勘定を確かにした。

(111) 皐陶^{こうとう}：五帝の一人である舜帝の家臣。法を制定した。

(112) 咎仲^{けいちゆう}：奚仲とも。夏王朝の車担当官。

(113) 伯益^{はくえき}：五帝である堯、舜、禹の三代に仕えた。禹のもとで宰相を務め、やがて禹から帝位を継いだ。

(114) 蒙恬^{もうてん}：始皇帝の時代の秦の將軍。匈奴を討ち、万里の長城を築いた。

(115) 蔡倫^{さいりん}：後漢の宦官。樹皮・ぼろ布・魚網などから紙を発明した。

六八大願の巨舶を造りて、普く三学分外の群類を絶わたしたもう。之れに依りて之れを觀れば、六合八極の一切衆生の往生極樂は如来初成の時に於て之れを決定し、弥陀法王の成等正覚は異生即詣の理に由りて之れを尅果す。行者、指を染めて自量せよ。又た吾祖大師、大悲罷むこと無のうして再降誕して重ねて細判して曰のく、

彼の仏、因中に弘誓を立てたまえり

名を聞きて我れを念すぜば、総すべて迎來せん

貧窮と富貴とを簡ばばず 下智と高才とを簡ばばず

無非淨土の業を簡ばばず 外道闡提の人を簡ばばず

長時に苦行を修するを簡ばばず

今日始めて心を生ずることを簡ばばず

多聞にして淨戒を持することを簡ばばず

破戒にして罪根の深きを簡ばばず

但た使だ、廻心して多く念仏すれば

能がり瓦礫りやくをして変じて金と成なさしめたもう

宜むなるかな、憑たのもしきかな。夫れ神丹九転すれば鉄銅を転じて黄

(116) 法照『淨土五会法事讚』（正藏四七・四八一下）。法照は後善導と呼ばれた。

金と成し、尊号一称すれば異生を転じて聖人と成す。用欽律徳(117)云く、

說法難の中に良に以れば此の法、凡を転じて聖と成すこと、猶お掌を反すがごとし。太だ容易(たやす)しと為すが故に、凡浅の衆生多く疑惑を生ずと上巳。

夫れ変化の種類、幾許(いくばく)か有る。所謂る鳥足(119)の根葉、化して蜻蟻(すくもむし)・胡蝶(121)と為り、瞿肉(ぼろむい)・比奚(ひ)変じて螢火(124)・青寧(125)と為り、千氷転じて水精(123)と為り、清水変じて美酒と為る等是れなり。此の四の物、豈に変化の情有らんや。只だ天然にして化を為すのみ。

然るに今、弥陀覚王瓦礫変金の宏誓を立てたまう。我れ等庸輩(126)、厭悪塵埃の懇情を発す。故に千即千化、万即万変の勝利有る者なり。豈に夫の非情変化の事に同じからんや。智人自量せよ。夫れ戒定慧の三学は即ち行者三業の修行なり。謂く持戒は身口の勤め、定慧は意業の行なり。

然るに本願の文を見るに、「至心信樂欲生我国」とは是れ意識の所作なりと雖も、只だ是れ厭欣安心にして全く定慧に非ず。「乃

(117) 用欽律徳…宋代の浄土教者である元照の弟子。

(118) 親鸞『教行信証』(正蔵八三・六〇七上)に同文の引用あり。散佚した用欽『阿弥陀経疏超玄記』の一節と考えられる。

(119) 鳥足…おそらくは「鳥足」の誤り。寛文版には「鳥足」とある。黒草のこと。

(120) 蜻蟻…土の中に住む虫のこと。

(121) 胡蝶…蝶のこと。

(122) 瞿肉…蝸のこと。

(123) 比奚…羊奚という草のこと。根は蕪(かぶ)に似ている。

(124) 螢火…螢のこと。

(125) 青寧…竹根虫のこと。

(126) 水精…水晶のこと。

(127) 庸輩…凡庸ですぐれたところがない人々のこと。

至十念」とは身口の行業なりと雖も、亦た即ち語業称名にして更に戒行に匪ず。卓拔高識の学者、自ら思択すべし。

又た黒谷尊師云く、⁽¹²⁸⁾

若し智慧高才を以て本願と為したまわば、愚鈍下智の者は定んで往生の望みを絶たん。然るに智慧の者は少なく、愚癡の者は甚だ多し。若し多聞多見を以て本願と為したまわば、少聞少見の輩は定んで往生の望みを絶たん。然るに多聞の者は少なく、少聞の者は甚だ多し。若し持戒持律を以て本願と為したまわば、破戒無戒の人は定んで往生の望みを絶たん。然るに持戒の者は少なく、破戒の者は甚だ多し。自余の諸行も之れに準じて心に知るべし。当に知るべし、上の諸行等を以て本願と為したまわば、則ち往生を得る者は少なく、往生せざる者は甚だ多からん。然れば則ち弥陀如来法藏比丘の昔、平等の慈悲に催されて普く一切を撰せんが為に、造像起塔等の諸行を以て往生の本願と為したまわず、唯だ称名念仏の一行を以て其の本願と為したまえるなり^云。

(128) 法然『選択集』(昭法全)三二〇。

夫れ行者等、設い縁事縁理の誓心無しと雖も、唯だ本願仰頼の信を以て、以て其の要心と為し、設い六度十到(129)の妙行無しと雖も、只だ持名称念の勤を以て、以て去行と為さば、水月の昇降決定して顯現すべし。是れ則ち別願の感応なり。焉んぞ思議すべけんや。

又た迎才『浄土論』に二道の修行を励まさんと欲して、先ず三学の有無を測量すべきの義を釈して云く、

『觀經』に云く、「若し能く至心に阿弥陀仏を念ずれば、一の念の中に八十億劫の生死の重罪を滅す」と。今既に時に約し根に約するに、行者定慧の分無き者は唯だ須く専ら阿弥陀仏を念じて浄土に生ぜんと求むべし。此れを要路と為すなり。若し自ら定慧の分有りと知らば、則ち此方に於いて道を修し無上菩提を求めよ。若し自ら定慧の分無しと知らば、則ち須く浄土の行を修して浄土の中に就きて無上菩提を求むべし。故に『智度論』に云く、「行者、阿毘跋致を求むるに二種の道有り。一には難行道、二には易行道、水陸兩路の如し。此方にして道を修するは則ち難く、猶し路の如し。浄土に生じて道を修するは則

(129) 十到…十到彼岸、すなわち十波羅蜜のこと。

(130) 迎才…『浄土論』(浄全六・六四下)。

ち易し、猶おし水路の如し」^{上四}。

又た慧浄師の『阿弥陀経義述』に云く、⁽¹³¹⁾

一たび彼土に生ずれば横に五道を截り、三界を超出して不退転に至る。初僧祇万劫の修行に当たれり。『十住毘婆沙論』

に云く、「修道に二有り。一には難行、二には易行。此土の修道を名づけて難行と曰い、西方の修道を名づけて易行と曰う。

跛^{あしな}たる人の陸路を歩行するに即ち苦しく、跛^{あしな}たる人の水路に乗船するに即ち樂しきが如し」^{上四}。

又た大智律師の『觀経義疏』に云く、⁽¹³²⁾

第二摂教分齊に三有り。初には二土立教の純雜を明かし、二には大小漸頓を弁じ、三には了不了義を簡ぶ。初に二土立教純雜を明かすに、釈迦一化所説の經教に大途二有り。一には娑婆入道の教觀、二には浄土往生の教觀なり。初の中に娑婆の五濁には惑業に重軽あり、根性に差別あり。機に在りて既に雜なれば數も亦た純ならず。故に大小科殊^{しな}に、偏円轍^{あど}異なること有り。經論の宗師、古今の判教、互いに不同有り、迭^{たがひ}に相い廢立す。

(131) 慧浄：五七八〜六四五年。中国唐代に長安の紀国寺に住した人物で、多数の著作があったと伝えられるがほとんどが散逸している。『阿弥陀経』の他『雜心論』『俱舍論』『大莊嚴経論』などの註疏もあつたといわれる。

(132) 慧浄『阿弥陀経義述』（正藏三七・三〇九上）。大智律師：中国宋代に戒律を復興させた靈芝元照（一〇四八〜一一一六年）のこと。永明延寿や四明知礼、慈雲遵式とともに、当时を代表する浄土教者としても知られる。浄土教の著作には『觀無量寿経義疏』

（『觀経新疏』とも呼ばれる）、『阿弥陀経義疏』、『無量寿仏讚』等がある。

(134) 元照『觀経新疏』（浄全五・三五四上）。

広くは他文に在り。備さに叙ぶべからず上。

戒度(135)『正観記』に之れを受けて曰く、(136)

問う、疏主両土の教法に純雑の異有ることを区分するは、前古にも未だ聞かず。達士は適従せざる無し。小智は尚お輕詔を生ず。典拠有りとや為ん、臆裁より出ずるとや為ん。試みに請う、申べ通じて永く疑惑を祛さけよ。答う、疏を造り、經を通じ、言を立てて教を判ずること苟いやしくも正量(137)無くんば、安んぞ敢て、心を師とせん。独り功無きみに非ず。反りて伊いの戚うれいを貽のこす。但だ義、群編に蘊して、名、今疏に出でたり。無文有義は智者之れを用ゆ。今、為に委しく陳べん。庶こいねが幾くは一たび悟れ。故に天台の『十疑論』に自力他力を明かせり。自力とは此土の修道なり。卒つひに未だ成ずることを得ず。他力とは若し弥陀を言ずれば大悲願力摂取して捨てず。即ち往生を得るなり。復た『十住婆沙論』の難易二道を引きて云く、「難行道とは此の五濁惡世に在りて無量の仏みちの所ところにて菩提の道を求む。是れを甚難と為す云。易行道とは謂く、仏語を信じて念仏三昧を修すれば仏力摂持し

(135) 戒度：生没年不明。元照の諸著作に注釈を施し、その浄土教を顕彰した人物として知られる。著作には『靈芝觀經義疏正観記』三卷の他、『觀經扶新論』一卷、『阿彌陀經義疏聞持記』一卷、『無量寿仏讚註』がある。

(136) 戒度『靈芝觀經義疏正観記』（浄全五・四四一上〜下）。元照『觀經新疏』の注釈書。

(137) 正量：聖典の言葉等を意味する正教量のことを指すと考えられる。ただし、正教量は聖教量とする場合が多く、正量のみで使用されることは少ない。

て即ち往生を得^云。準知するに、自力難行道は此土入道の教に非ずや。他力易行道は浄土入道の教に非ずや。又た善導の『玄義』の如きは、專雜二修を以て両土の進道の不同を分かつて。瑛師の『修証議』⁽¹³⁸⁾の中には、乃ち此方の破惑証真と西方浄土に生ぜんと求むるとの説有り。疏主、深く仏意を得、仰ぎて先賢を則とす。故に茲の高判独り古今に抜く。四海をして咸く規とし、万載不易ならしむべし^上。

又た『宝王論』⁽¹³⁹⁾に云く、

『十住婆沙論』并に龍樹菩薩の造『華嚴經』を積す論の易行品に云く、「菩薩の道に難行の行有り。陸地に舟に乗るが如し。易行の行有り、水路に舟に乗るが如し。阿弥陀仏の本願の力は、若し人、名を聞きて称念すれば、自ら彼の国に帰す。」舟の水を得て又た便風に遇えば、一挙千里するが如し。亦た易きにあらざるや^上。

おほよそ
大凡二道の高卑等は、具さに西祖^{馬鳴・龍樹}、東師^{鸞・紳・顛・其等の衆賢}等の高判に出づ。文繁きが故に於是に載せず。知らんと欲せば之^{おもむ}いて看よ。

(138)

桐江折瑛（一〇四五～一〇九九年）の『浄土修証義』のこと。現存しないが、一部が『復宗集』（古統蔵五七六七下）に「弁浄土修証」と題して採録されている。折瑛は元照と共に中国宋代の浄土教者として知られ、『浄土修証義』において善導の專雜二修の文を引用するのみならず、この世で悟りを開くための無生觀と極樂往生を求めるための有生觀の二種の觀法があると述べている。

(139)

飛錫『念仏三昧宝王論』（浄全六・七四〇下）。

如何が難行なる。非願の故に難行なり。如何が非願なる。自力の故に非願なり。如何が自力なる。式内の故に自力なり。如何が式内なる。難証の故に式内なり。如何が難証なる。聖道の故に難証なり。如何が聖道なる。断証なるが故に聖道なり。如何が断証なる。漸成なるが故に断証なり。如何が漸成なる。頓教に非ざるが故に漸成なり。如何が頓教に非ざる。權教なるが故に頓教に非ざるなり。如何が權教なる。本懷に非ざるが故に權教なり。權教なるが故に頓教に非ず。頓教に非ざるが故に漸成なり。漸成なるが故に断証なり。断証の故に聖道なり。聖道の故に難証なり。難証なるが故に式内なり。式内の故に自力なり。自力の故に非願なり。非願の故に難行なり。

又た如何が易行なる。本願の故に易行なり。如何が本願なる。他力の故に本願なり。如何が他力なる。格外の故に他力なり。如何が格外なる。易証の故に格外なり。如何が易証なる。往生の故に易証なり。如何が往生なる。頓撰の故に往生なり。如何が頓撰なる。頓教の故に頓撰なり。如何が頓教なる。実教の故に頓教なり。如何が実教なる。本懷の故に実教なり。実教の故に頓教なり。頓教の故に頓撰

なり。頓擧の故に往生なり。往生の故に易証なり。易証の故に格外なり。格外の故に他力なり。他力の故に本願なり。本願の故に易行なり。智人商量せよ。智人商量せよ。

夫れ自力難行の修者は覺城に透徹しがた匡がたきこと、譬えば一品を望み及第を経るに太はなはだ遂げ匡がたきが如し。他力易行の持者は淨刹に往詣し易きこと、猶し一官に任じて廢官官を受くるにも得易きに似たり。一切の信男信女等、応に早く難得落第の諸行を抛て、易得受廢の淨土を修すべきのみ。請い問う。曰く、夫れ三学分外の得脱は是れ三軸の往生の誠説なり。逆謗犯重の往生は乃ち五部九卷処の定判なり。学者自ら之れを知れ。抑そも当も今末法の時に於ては、羊鹿白牛已に斃たおれて飛輅ひろ独り運び、渾濁造惡の世に於ては一三の法船忽ち沈みて願船特り渡れり。行人豈に之れを欣慶せざるべけんや。有識高智の道人等、応ま當さに早く三学難行の域いきこん閫閫を出でて、九品易行の妙門に入るべし。

夫れ以れば、瓢ひさしを拵しり、橈うぢわを捨めつるは、是れ自力泥滯の人、淨教を廢するの謂いか。玄が『莊疏』に云く、「世情に附かざるが故に、

(140) 廢官：父のおかけによって得る官位。

(141) 三学難行之域閫：城閫は門で固く閉ざされた地域のこと。三学を修める難行で覺りをもとめようとする仏教の教え（聖道門）を例えた語。

(142) 瓢拵捨橈：『莊子』「逍遙遊篇」にある瓢箪問答、橈木問答のこと。一見大きすぎて役に立たない瓢箪や橈木にも、捉え方によって素晴らしい価値があるとする無用の用に関する話。

大言里耳りじに合あわあずう」⁽¹⁴¹⁾。又た曇鸞の『論註』に云く、「非常の言、常人の耳に入いらず」⁽¹⁴²⁾。樽つくに為なる樹うゑを樹うゑるは、乃ち宿善薰芳たぐの彙たぐいの真宗を執とるの謂いいか。『經』に云く、

曾て更に世尊を見たてまつるもの、則ち能く此の事を信ず。

謙敬して聞きて奉行し、踊躍して大いに歡喜うゑす⁽¹⁴³⁾と。

智人商量すべし。余、自力の行者を視聴するに、多く難得難証を憂う。

今教示して曰く、夫れ影を畏れて迹あとを悪にくむ者は、宜しく陰おに処おり、静しずに処おるべし。⁽¹⁴⁴⁾行ぎやうを憂うれえ、難がたを歎なげく者は当あたに聖せいを捨すてて、淨じやうに歸かへすべし。嗚呼あゝ、六賊むく知聞しもんして此この法財ほふざいを失うふこと、毒虵どくへんを愛あいするよりも過あまりたり。煩惑ぼんかく千間せんかんにして無生期むじうきし難がたきこと、碁卵かきたまごを累かさねるよりも危あやうし。行者ぎやう慎しんむべし、行者ぎやう慎しんむべし。⁽¹⁴⁵⁾抑おさ八家大乘はつかだいじやうの学者がくしや、弘願流行こうげんりやうの世よに生なずと雖なも、弥陀みだつの尊号そんごうを唱となえずして、我性わがじやう難頭がたづなりと愁吟しゆいんする者は、譬たとへば薛荔せつれいの達池たつちに臨まみて枯渴こかくを憂うれうるが如く、又た文武ぶんぶの明玉めいぎよくを見て夜闇やあんを嘆なげくに似にたり。憫あわれむべし、憫あわれむべし。又た摩尼まにと明月めいげつとは宝珠ほうしゆの高卑かうひ、梅檀ばいだんと沈水しんすいとは芬芳ぶんぱうの浅深せんしん、

(143) 成玄英『莊子注疏』。『莊子』の註釈書。原典未詳。

(144) 曇鸞『往生論註』（淨全一・二四九上）。

(145) 『無量壽經』（淨全一・二二）。

(146) 畏影惡迹ゐいんおくじ、処陰処静じょいんじょじやう…心配しんぱいごとにとらわれて心の平静へいじやうを得えられぬ時は、静かに過あますべきであるということ。『莊子』「漁父篇」に、自らの影や足跡あしあとに怯おそえて、それから逃にれようとして走り続つけたものが、ついに力ちから尽つきて死しんでしまったという故事ごとがある。

(147) 六賊むく…眼耳鼻舌身意がんじにびしごんいの六根むくこんのこと。

(148) 八家大乘はつかだいじやう…真言宗しんげんしゆ、仏心宗ぶつしんしゆ（禪宗ぜんしゆ）、天台宗たいたいしゆ、華嚴宗けわげんしゆ、三論宗さんろんしゆ、法相宗ほふさうしゆ、地論宗ぢろんしゆ、撰論宗せんろんしゆの八家はつかのこと。『選択集せんたくしゆ』ではこれらの八家はつかを聖道門せいだうもんに括くわめている。

(149) 薛荔せつれい…餓鬼がきのこと。サンスクリット語 *prata* の音写語。「薛荔多せつれいた」ともいう。

(150) 達池たつち…阿耨達池あうだつちの略称りやくしやうで、古代インドの世界観せかいかんでは、ヒマラヤ山の北側きたがはにあるとされる湖うみのこと。この湖うみに辿たどり着つくには特別な能力とくべつなりよくが必要ひつやうとされる。

(151) 芬芳ぶんぱう…よい香かりのこと。

式内と格外とは解脱の勝劣、断証と横截とは出離の遅疾、拔苦有道の
智人、二道相對して其の殿最を知るべし。

夫れ以れば三密十乘の鈍刀は未だ煩惑の緇を斬らず。六字一声
の利劍は速やかに業繫の鱗を砕く。誰れの智人か、之れを諍うべ
けんや。古に云く、医方万品なるは、宜しく対治を選ぶべし。海宝千
般なれども、先ず如意を求めよと。若し解脱の捷徑を求むるの人有
らば、速やかに三學式内の闡域を出でて、早く六字の格外の妙門に
入れ。

夫れ聖道の諸行を修するに、猶おし万仞の船筏を大行の嶮路に
盪すが如く、浄土の妙業を勤むるに、宛かも一葉の舟舶を巨瀛
の波瀾に飛ばすに似たり。然るに孰れの彙いか是れ稟獲なるや。
誰れの人か亦た大士なるや。嗚呼、一簣の山を為りて九仞に登ら
んと欲し、一捻の土を取りて千鈞を壓せんと欲す。其れ難から
ざらんや。慎めや、慎めや。諸方の行者等、甕を抱きて出でて灌ぐ
こと莫れ。専ら棹を機りて蔬を潤すべし。

請い問う。密行人の中に適功能の行者の生死を得脱すること

(152) 殿最：優劣のこと。「殿」はしんがり、「最」は軍のさきがけの意。

(153) 三密十乘：真言宗の三密の行法と、天台宗の十乘觀法のこと。

(154) 巨瀛：広い海のこと。

(155) 稟獲：夏王朝の時、寒淀の子稟が多力で能く陸地に舟を推し動かしたという故事がある。低劣な人のこと。「稟」はあなどる、おごる、「獲」は身分の低い女性の意。

(156) 一簣之山：欲登九仞：九仞の高い山を築くのに、最後の一杯の土を欠いても完成しないこと。長い努力の末、事が今にも成就しようとしている、最後のわずかな過失のために失敗することのたとえ。

(157) 甕：水や酒を入れる器。

(158) 棹：柱の上に横木を渡し、その一端に石などの重しを取りつけた井戸水を汲み上げる仕掛けのこと。

(159) 蔬：草本類のこと。

有り。是れ則ち淨刹の往生なるが故に、尤も吾が家の得分なりと謂いつべし。又た設い俱博等の如きの功能成仏の彙い有りと雖も、未だ二失(161)を遁れず(160)。猶お是れ難行自力の道に墮す。何が故に然るや。出獄成仏するは何の言ぞや。她覺の妄情を断じて、

藤覺の実見を生ずる。之れを証得菩提と名づくるの故なり。故に去聖遙遠・理深解微の失を招くのみ。

夫れ以れば上悉は是れ難行の撰、中悉は廻すなわち易行の益なり。若し爾らば君、真言功能の勝用は淨土真実の巨益を超絶せりと謂うこと莫れ。

亦た円密の宗者、之れを難じて曰く、式内の修行も解脱の正因、格外の称揚も出離の勝業なりと。二道、絳さい異いなり。違諍を致すこと莫れ。戒度の云く、「淨土の法門、大いに常途に異なるなり。但だ願求を作せば、即ち超往することを得(164)」上上と。『文選(163)』に云く、陶・匏ほう、品異なれども並びに耳に入るの娛たのしみに為り。黼ふ・黻ふく、同じからざれども俱に目を悦たのしむ翫もてあそび為り(165)。

(160) 俱博：不空訳『金剛頂瑜伽最勝秘密成仏隨求即得神變加持成就陀羅尼儀軌』や平

康頼の撰述と伝えられる『宝物集』に、一生悪業ばかりを重ねて地獄に墮した俱博という婆羅門が隨求陀羅尼の真言の功德によって救われたという説話が収録されている。

(161) 二失：天台宗の最澄と論争した法相宗の徳一が、即身成仏への疑義として挙げた行不具失と欠慈悲失のこと。

(162) 断她覺之覺之実見：『撰大乘論』等に説かれる、いわゆる蛇繩麻の比喩のこと。唯識説の三性説について、「蛇」と思い込むのが迷いの見方である、遍計所執性、「繩」と気づくのが依他起性、「麻」と見抜くのが悟りの見方である円成実性であり、蛇から麻へ段階的に悟入してゆくことを説く。なお、真諦訳『撰大乘論』は「繩」の語を「藤」とする。

(163) 戒度『靈芝觀經疏正觀記』（浄全五・四三六七）。

(164) 黼黻：黼も黻もともに模様(165)の名称。黼は斧の形を白黒交互にぬいとりした模様。黻は黒青交互に「己」の字が背いた形にぬいとりした模様。

(165) 梁・昭明太子編『文選』序文。

又た賁鼓(166)密しくして響を含み、竜笛(167)透いて音を発すといえり。

豈に爾らずと云わんや。但だ六大四曼(168)の慧灯光り、幽にして二種

生死の大夜未だ曙(169)ず。止観上乘の智水潤い涸れて、三三妄五住(170)の高原、

尚お堅(171)し。高識深智の道人等も商量せよ、思忖せよ。

抑(172) 当今末法の時に於て聖道の行果を得んと欲すと雖も、行果

得べきこと難し。譬えば木に縁りて魚を求め、山に升りて珠を採

るが如く、亦た荷(173)を山上に樹え、火を井中に畜うに似たり。豈に尅

果することを得べけんや。末代悪世の中に於て善く二死の重療(174)を療

するは、只だ是れ弥陀尊号の霊葉のみなり。然りと雖も、人、之れを

服餌(175)せざるが故に多く生死の重病を病めり。古に云く、

病家の廚(176)に嘉饈無きに非ず。乃ち其の人、之れを能く食せざ

るが故に遂に死す。乱国の官に賢人無きに非ず。乃ち其の君、

之れを能く用いざるが故に遂に亡(177)ずと。

唯だ願わくは一切衆生、急に岐路を出でて速かに直道に趣き、持

名の大善を行じて九品の淨刹に詣ぜよ。

『秘藏宝鑰』に云く、

(166) 賁鼓：大きな鼓。

(167) 竜笛：雅楽で使われる管楽器のひとつ。

(168) 六大四曼：六大とは地水火風空識の六つで衆生を構成する要素をいう。四曼とは

四種曼荼羅（大曼荼羅、三昧耶曼荼羅、法曼荼羅、羯磨曼荼羅）のこと（『綜佛年報』

三三・一〇七頁・註二）。

(169) 三三妄五住：三妄とは我執、法執、無明を

いい、五住とは五住地惑の略であり、衆生を三界に執着させる煩惱すべてをい

う。

(170) 荷：蓮のこと。

(171) 服餌：道教の方術のひとつ。薬物・食物の摂取による養生方法。

(172) 空海『秘藏宝鑰』（正蔵七七・三六八上）中。

疾に軽重有れば薬に則ち強弱あり。障に厚薄有れば教えに則ち浅深あり。増劫は病軽きをもつて、輪王、人を御し、滅劫は障り厚きをもつて、如来、教えを垂れたまう。五濁悪世、衆生は病重くして三毒鬱として興り、八苦身を迫め福德薄少にして、貪病極めて多し。^{至乃}此の生に悪業を作りて、後に当に三途に墮すべし。三途の苦は劫を経ても免れ難し。如来の慈父、此の極苦を見て其の因果を説きたまう。悪の因果を説きては其の極苦を抜き、善の因果を示しては其の極果を授く^{上巳}。

之れを以て之れを觀ずれば、根利障輕の彙いを化するは是れ淺教か。根鈍障重の輩を導くは乃ち深法か。若し爾らば、今此の淨土の一宗は能く五逆八重^四の惡輩を濟い^{すく}、三学分外の魯鈍を度す。是れ最大深厚の洪教と謂うべし。

密行の人、難じて曰く、夫れ発心修行・証得菩提の階位を経歴することは是れ偏小権大、漸教の次第なり。発心即到・初心即極の秘奥を開演するは、廻ち円密実大、頓行の妙益なり。『大日經』に云く、「云何が菩提なる。謂く実の如く自心を知るなり^四」。『同疏』の

(173)

五逆八重：五逆は殺母、殺父、殺聖者、出仏身血、破和合僧のこと。八重は姪戒、盜戒、殺人戒、大妄語戒に比丘尼戒の四波羅夷を加えたもの。

(174)

善無畏・一行訳『大日經』（正藏一八・二下）。

第一に云く、「若し実の如く自ら知るは、即ち是れ初発心の時に便ち正覚を成す。譬えば長者の家の窮子の如く、若し自ら父を識る時に、豈に復た是れ客作の賤人ならんや」⁽¹⁷⁶⁾。又た云く、「発意の頃に於て便ち所詣に至る」⁽¹⁷⁷⁾。『秘鍵』に云く、「迷悟、我に在れば、則ち発心すれば即ち到る」⁽¹⁷⁸⁾と。若し発心の時に於て則ち菩提の果に到らば、豈に遠く修行証果の時を待つべけんや。若し爾らば、聖道難行の過失は唯だ偏小権大の修行のみに在りて全く円密実大の行人には関らざる者をや、何如。

答えて曰く、此の義、太早⁽¹⁷⁹⁾なり、疎忽なり。夫れ智目行足・到清涼地は是れ四依大聖の決判なり。発菩提心・修菩薩行は廻ち円密二教の綱なる者なり。設い円密相應の頓機⁽¹⁸⁰⁾為りと雖も、必ず応に聞信解行証の次第有るべし。譬えば神通の人、空中を飛びて地上を踐まざれども、必ず其の里数を経るが如し。又た彼の在世の得度の人の如きは、皆な聞經の処にして四乗の勝益を得たり。然りと雖も一座聽法の中に於て必ず五位を経歴せり。何を以て知ることを得とならば、一代諸經の会末を觀ずるに、歡喜奉行の説文有るが故に当機獲益の一

(175) 一行『大日經疏』（正藏三九・五八七中）。

(176) 一行『大日經疏』（正藏三九・五七九下）。

(177) 空海『般若心經秘鍵』（正藏五七・一一上）。

(178) 太早…太早計のこと。はやまり過ぎた考え、はや合点の意。

(179) 四位大聖…四依とは依りどころとするべき四つの事柄。法四依、行四依、人四依の別がある。ここでは人四依を指す。

(180) 五位…菩薩が仏に至るまでの修行の五段階。資量位、加行位、通達位、修習位、究竟位のこと。

段有り。故に如来滅後の行人も亦復た然り。所以に『摩訶止観』の大意の五略には発大心・修大行・感大果・裂大綱・帰大処と判じ、又た円人の行位を聞信行住・莊嚴建立と定めたり。又た『摩訶止観』の第五に云く、

復た匠他を闕く。盲跛の師徒、二つ俱に墮落す。警蹶の夜遊、甚だ怜愍すべし。応に上の諸人に対して此の止観を説くべからず。夫れ止観とは、高尚なる者は高尚なり。卑劣なる者は卑劣なり^上。

『輔行』第五に云く、

盲跛等とは、解無きは盲の如し。行無きは跛の如し。師既に是の若し。弟子知るべし。故に俱に墮落す。至乃盲跛相い^よりて能く遠至或有るが如し。至乃次に警蹶とは、目無きを警と曰い、足跛^{あしなえ}を蹶と曰う。既に盲にして且つ跛^なえて復た夜遊す。解無く行無くして仏教を失するを無明の夜に遊ぶと曰う。至乃妙解行高尚なる者は前に信有るが如し^上。

『釈籤』に云く、

- (181) 智顛『摩訶止観』（正蔵四六・四九上）。
盲跛：目と足が不自由なこと。
(182) 警蹶：目が見えない状態で走るさま。あ
るいは目が見えず躓くさま。
(183) 湛然『止観輔行伝弘決』（正蔵四六・二八〇
中〜下）。
(184) 湛然『法華玄義釈籤』（正蔵三三・八二九下）。
(185)

今言く、盲にして跛えざるは、行有りて解無きが如し。跛えて盲ならざるは、解有りて行無きが如し。若し解行具足するは、猶おし二つ全まったきが如し上已。

『金剛般若』に云く、「善男子善女人、阿耨多羅三藐三菩提心を発して、応に是の如く住し、是の如く其の心を降伏すべし」上已。『同註』に云く、

阿の言は無なり。耨多羅の言は上なり。三の言は正なり。藐の言は徧なり。菩提の言は知なり。無とは諸の垢染（註）無きなり。上とは三界に能く比ぶべき無し。正とは正見なり。徧とは一切智なり。智とは一切有情に皆な仏性有り、但だ能く修行すれば尽く成仏を得と知るなり。仏とは即ち是れ無上清浄の般若波羅蜜なり。是れを以て一切の善男子善女人、若し修行せんと欲せば、応に無上菩提の道を知るべし。応に無上清浄般若波羅蜜多の法を知りて、此れを以て其の心を降伏すべし上已。

又た云く、（註）

口に説きて心に行ぜざるは即ち非なり。口に説き心に行ずる

(186) 羅什訳『金剛般若経』（正蔵八・七四九上）
(187) 道川『金剛経註』（正統蔵二四・五三八下）
(188) 垢染…けがれに染まること。
(189) 道川『金剛経註』（正統蔵二四・五五〇上）

は即ち是なり。心に能所⁽¹⁹⁰⁾有るは即ち非なり。心に能所無きは即ち是なり^上已。

又た云く、⁽¹⁹¹⁾

無生の理を悟り、希望の心を息^やめ、衆生顛倒の知見を遠離すれば、即ち波羅蜜彼岸に到る。永く三塗を出でて無余涅槃を証すればなり^上已。

又た云く、「深く無相の理を解するが故に、善く仏意に契^{かな}うが故に、仏如是と⁽¹⁹²⁾言う。如是の言は是れ印可の辞なり」^上已。又た『註金剛經』に云く、⁽¹⁹³⁾

学人、如来の深意を解せずして、但だ如来所説の教法のみを誦して本心を了^{さと}らず。本心を了らざれば終に成仏せず。故に不可説と⁽¹⁹⁴⁾言う。口に誦して心に行ぜざるは即ち非法なり。口に誦し心に行じて無所得⁽¹⁹⁵⁾を了らば即ち非法なり^上已。

牟子^{ぼうし}に曰く、⁽¹⁹⁶⁾

如し其れ言無くんば、五千何ぞ述べんや。若し知りて言わざるは可なり。既に知ること能わず。又た言うこと能わざるは

(190) 能所：認識の主体と客体。仏教では一般に主客二分のあり方を迷いとして批判する。

(191) 道川『金剛經註』（『正藏統』二四・五五四上）。

(192) 印可：印信許可、または印定許可の略。仏が弟子の理解を承認すること。

(193) 道川『金剛經註』（『正藏統』二四・五五五上）。

(194) 道川『金剛經註』（『正藏統』二四・五五五上）。

(195) 無所得：心のなかで執着や分別をしないこと。主観と客観の区別のないこと。何ものにもとられない境地。

(196) 牟子『理惑論』の引用か。本文は僧祐『弘明集』（正藏五二・五上）に収録される。

愚人なり。故に能く言いて行うこと能わざるは国の師なり。能く行いて言うこと能わざるは国の用なり。能く行い能く言うは国の宝なり。三品各施す所有り。何ぞ徳の賤しきことあらんや。唯だ言うこと能わず、又た行うこと能わざるは是れを賤と謂う

上巳。

凡そ六即七位の階級は、専ら是れ聞信解行証の次第なる者をや。

又た『菩提心論』に云く、

人の名官を貪ずる者は、名官を求むる心を発して、名官を理むる行いを修し、若し財宝を貪ずる者は、財宝を求むる心を発して、財物を経営する行いを作すが如し。凡そ人の善と悪とを為さんと欲するに、皆な先ず其の心を標して、而して後に其の志を成ず。所以に菩提を求むる者は、菩提心を発して菩提の行を修すべし動。凡そ伽の観行を修習する人は、当に須く具さに三密の行を修して、五相成身の義を証悟すべし。

夫れ本論一部の始末を案ずるに、上に勝義・行願・三摩地の三種の菩提心を勧め、下に三密・瑜伽・五相成身の行証を教えたり。

(197) 六郎：天台宗において、菩薩の修行過程を六つの段階（理即、名字即、観行即、相似即、分身即、究即）に分けたもの。

(198) 七位：七賢位のこと。聖者の位（見道）に入る前の三賢位（五停心観、別相念住、総相念住）と四善根位（煖法、頂法、忍法、世第一法）を合わせたもの。

(199) 龍猛造・不空訳『金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐三菩提心論』（正蔵三三・五七二下、五七四中）。

(200) 五相成身：五法成身、または五転成身ともいう。密教において、行者が五相（通達菩提心、修菩提心、成金剛心、証金剛身、仏身円満）の観行を修して大日如来の身を成就すること。

(201) 勝義行願三摩地：密教における三種の菩提心。真理を観じて現す勝義菩提心、行を修し願を発す行願菩提心、三密の行を修して大日如来を現証する三摩地菩提心を指す。

正しく是れ真言行者の因根究意の次第なるのみ。但だし出だし難
ずる所の衆文に至りては、或いは是れ不起于座三摩地現前の機有り
て、発心已後、即ち一念二座の中に於て、頓に聞信解行証の五位を具
足するに約して、以て語うことを為す。三祇を一念に超え、万行を
一善に摂する等は是れなり。

或いは又た只だ菩提心の靈徳を歎ず。所謂る一足衢ちまたに迷えば
行千里を失い、安心僻へんぎ越すれば万行徒いたずらに設もうく。然るに今、生生に
も逢い難き三密の大数に値い、世世にも発し難き無上の道心を発して、
妙に六大四曼の体相を了知し信解せり。此の上に毘盧の大道を勤修し
て、遮那の境智を究意せんこと(205)の遲速に於ては、宜しく行者の進退
に在るべし。故に初発の功力を歎じて、以て「発心則到」等と云うなり。
全く修行証果の次第有るを遮せざるのみ。或いは是れ因中説果の意
なるべし。所謂る『涅槃經』二十七に云く、

善男子、譬えば人有り、悪心をもて母を害す。害し已りて悔
を生ず。三業善なりと雖も是の人故ゆゑに地獄人と名づくるが
如し。何を以ての故に。是の人定んで当に地獄に墮すべきが

(202) 三祇：三大阿僧祇劫の略。菩薩が修行し
て仏になるまでの時間。

(203) 衢：大きな道のこと

(204) 安心僻越万行徒設：湛然『止観輔行伝弘
決』（正蔵四六・一六七上）に、「発心僻越
万行徒施」とある。

(205) 勤修毘盧：那之境智：毘盧の大道は密
教の修行を指し、遮那の境智は天台の
修行を指す。空海『秘蔵宝鑰』（正蔵
七七・三六三下）に「第八如実一道心一如
本浄境智俱融知此心性号曰遮那」とある。
ここでは、この心性（十住心の第八如実一
道心または一道無為心）を知るものを遮那
と号すとされている。

(206) 因中説果：原因の上に仮に結果の名を与
えて説くこと。それに対して、結果の上
に仮に原因の名を与えて説くのを果中説
因という。

(207) 曇無讖訳『涅槃經』（正蔵二・五二四中）。

故に。是の大地獄の陰界諸人無しと雖も、猶お故に名づけ
て地獄人と為ることを得。善男子、是の故に我れ諸經の中に
於て説く。若し人有り、善を修行する者を見れば天人を見る
と名づけ、悪を修行する者をば地獄を見ると名づく。何を以
ての故に。定んで報を受くべきが故に。善男子、一切衆生は定
んで阿耨多羅三藐三菩提を得べきが故に。是の故に我れ、一切
衆生に悉く仏性有りと説く。一切衆生眞實に未だ三十二相八十
種好有らず^上。

凡そ道理成仏の法は、必ず聞信解行証の五位を経るなり。智人思
扱せよ。抑又た『秘鍵』の「発心即到」の文を引き、修行を待た
ずして唯だ発心の功用のみに由りて、直ちに覺王城に到るといふの誠
証に備うることを、大いに解釈の大猷に迷いて、以て一句の文言を執
するのみ。今具さに文の前後を勘出して、以て臆徒の執弊を撥却せん。
『秘鍵』に云く、

夫れ仏法遙かなるに非ず。心中にして即ち近し。眞如外に非ず。
身を棄てて何れにか求めん。迷悟、我れに在れば、則ち発心す

(208) 陰界諸人：五蘊・十八界・十二処（入）の略称。

(209) 大猷：大きな道のこと。

(210) 撥却：はらいすてること。

(211) 空海『般若心経秘鍵』（正蔵五七・二一上）。

れば即ち到る。明暗他に非ず。則ち信修すれば忽ちに証す^上巳。

夫れ上に「発心即到」と云い、下に「信修忽証」と云う。是れ豈に発心修行、証大菩提の次第を示すに非ずや。学者、眼を著けて文意を看取せよ。凡そ此の文に於ては、全く問者の援扨に非ず。正しく是れ小子が誠証なるのみ。抑今小子、君に問わん。君、日に云何が菩提心・如実知自心・知一切法皆是佛法等の円密の大菩提心を発得して、故に頻りに匂^のつて「発心即到」と曰うか。將た又た自らは未^{いまだし}なれども、只だ其の教理を立つるのみか。若し未^{いまだし}にして之れを言わば「日夜他の宝を数えて自らは半銭の分無し」の厳誠、奚ぞ遁^{のが}ることを得んや。若し未だ円密の大心を発得せずば、速やかに他力の要行を勤めよ。時に密行の人、服膺^{ふくよう}して恥慙す。

又た或る円密の行者難じて曰く、夫れ円密両宗の行相を案ずるに、或いは「無明塵勞即是菩提」と云い、或いは「食欲即是道患癡亦復然」と言えり。若し之れに依りて之れを観ずれば、凡位を動ぜずして当処即ち果仏なり。断証を仮らずして直爾^{ただち}に是れ覚体なり。又た「教道云断証道不断」と判ずる者をや。若し爾らば、奚ぞ難行難証

(212) 如実知自心：十住心の第八一道無為心に同じ、ここでは天台の教えのことを意味する。

(213) 知一切法皆是佛法：『摩訶止観』（正蔵四六一〇中）。

(214) 智顛『法華文句』（『正蔵』三四二中）。

(215) 服膺：心にとどめて忘れないこと。

の憂い有らんや。

答えて曰く、五悔⁽²¹⁶⁾修行の明文有り、召罪摧罪の印明有り。豈に是れ止悪修善滅惑証理の義相に非ず。『金剛頂経』に云く、

好色相を見ざる者は即ち是れ罪障なり。応に鈞罪障の契を以て彼の諸罪を鈞り、復た摧破諸罪の契を以て之れを摧破すべしと。

又た『金剛頂経』に云く、

或いは衆生有りて、深く邪見に入りて正法を楽わず、世間の資財飲食に耽著して外道天神を信じて顛倒に住せん者、亦た応に勧進して此の金剛界の壇場に入らしむべし。彼の邪見の衆生を抜きて、悪趣を離れしめんと欲するが為の故なり⁽²¹⁷⁾。

又た『撰真実経』に云く、

若し凡夫の人、此の観門を修せば、五逆一闡提等の悪業を造ると雖も、悉く皆な消滅して時に応じて便ち五種三昧⁽²¹⁸⁾を獲⁽²¹⁹⁾上。

大底登壇灌頂の儀則、阿遮多擊の脱喝⁽²²⁰⁾、皆な是れ禁惡防非の幟幟、断惑証理の相貌なるのみ。高識の密人、応に知るべし。又た『法華』

(216) 五悔：金剛界法を修する時に誦誦する偈頌。普賢菩薩の十大願を帰命、懺悔、隨喜、勧請、廻向の五つにおさめる。天台宗では、法華三昧を修するものが行う懺悔、勧請、隨喜、廻向、発願の五種の懺悔法。

(217) 金剛智訳『金剛頂瑜伽中略出念誦経』（正蔵一八・二五〇上・中）。

(218) 出典未詳。『金剛頂大教王経私記』（正蔵六一・三三二中）に同文あり。

(219) 『諸仏境界撰真実経』（正蔵一八・二七六下）。五種三昧：一刹那三昧、二微塵三昧、三白縷三昧、四隱頭三昧、五安住三昧のこと。

(220) 阿遮多擊之脱喝：不動明王左眼を閉じて、右を開いて脱む顔のこと。左眼を閉じるのは、生死迷妄の世界を表し、右眼で脱みつけるのは衆生の悪業煩惱を断除することを表す。脱は脱のことか。

第一に云く、⁽²²²⁾

若し人信じて仏に帰するに如来は欺誑ならず。亦た貪嫉の意無し。諸の法中の悪を断じたまえり。故に仏、十方に於て而も独り畏るる所無し^上。

同第五に云く、⁽²²³⁾

如来亦復た是の如し。三界の中に於て大法王と為りて、法を以て一切衆生を教化したまう。賢聖の軍の五陰魔・煩惱魔・死魔と共に戦いて大なる功勳有りて、三毒を滅し三界を出でて、魔網を破るを見たまいて、爾の時如来、亦た大いに歡喜したまう。

此の法華経は能く来生をして一切智に至らしむ^上。

『註金剛経』に云く、⁽²²⁴⁾

滅度とは大解脱なり。大解脱とは煩惱及び習氣の一切の諸の業障滅尽して、更に余り有ること無き、是れを大解脱と名づく。無量無数無辺の衆生に元より各自に一切の煩惱貪嗔悪業有り。若し断除せずんば終に解脱を得ず。^{至乃}一切の迷人は、自性を悟り得て始めて仏を知る。自相を見ず、自の智有らざれば

(222) 『妙法蓮華経』(正蔵九・八上〜中)。

(223) 『妙法蓮華経』(正蔵九・三九上)。

(224) 『金剛経註』(中統蔵二四・五三九下)。

何ぞ曾て衆生を度せん。祇だ凡夫は自の本心を見ざるが為に仏意を識らず、諸の法相に執著して無為の理に達せず、我人を除かず、是れを衆生と名づく。若し此の病を離れぬれば、実に衆生の滅度を得る者無からん^上。

『菩薩本業瓔珞經』の下に^{仏母品}第五云く、

無明藏⁽²²⁵⁾と心と一と為んや、異と為んや。^{至乃}仏子、汝先に無明と心と一なりと言うは、是の事然らず。若し解と無明諸見と一相ならば、応に縛解無かるべし。凡と仏と二に非ず。所以は何ん。煩惱同一体相なるが故に。何を以ての故に。而も共に一心の生滅一時にして別ならず、異ならざるが故に。仏子、若し縛解一相ならば、四大一と為すべし。六味⁽²²⁶⁾応に異ならざるべし。而るに大いに異なり。味異なるが故に、縛解も亦た是の如し。仏子、一切の菩薩凡夫^た為りし時、一切の結縛を具足し、断ずる時は麤分先ず去りて、細分後に除く。若し一心と煩惱と一ならば、応に明闇二有るべからず。仏子、復た近を以て遠を況するに、凡夫の善心の中に尙お不善無し。何に況んや、無相の心中に

(225) 『菩薩本業瓔珞經』(正藏二四・二〇一八下、一〇一九上)。

(226) 無明藏…すべての苦をもたらす因である無明を藏にたとえた語。

(227) 縛解…縛とは煩惱を指す。すなわち、煩惱と解脱のこと。

(228) 六味…苦、酸、甘、辛、鹹、淡の六つの味のこと。

而も無明有らんや。仏子、面も善悪一心と云う者は、是れ泚沙王国中の外道安陀師が偈に「明闇一相、善悪一心」といへり。仏子、我が法正義なり。市も善悪同一行と云うことを得べくんば、縛有り、解有り、凡有り、仏有り。相續すること百劫なり。同一行ならば而も善悪同一心なることを得ず。古仏常に無相の智火は無明の闇を滅すと説く。善悪の二つ別なり。而も同一果と云うは亦た是の処（こゝろ）無し。一切の善は仏果を受く。無明は有為生滅の果を受く。是の故に善果は善因従り生ず。是の故に悪果は悪因従り生ず。故に善は生滅の果を受けず、唯だ常仏の果を受くと名づく。仏子、若し凡夫聖人は一切の善を皆な無漏と名づく。漏果を受けず。而るに果を受くと云うは、仏衆生を化するに善を行じ、悪に背くが故に因に縁りて、有漏果報を発して無漏と為るに非ず。因は無明業、果を受くるが故に。是れを三受（三受）三苦（三苦）と名づく。苦苦・行苦・壊苦、苦受・樂受・捨受なり。二受は善縁の因果なり。苦受は悪の因果なり。一切皆な苦なり。無明を以て本と為す（上）。

(229) 泚沙王：ヒンピサーラ王のこと。

(230) 三受：苦しみの感覚である苦受、快適の感覚である樂受、快でも不快でもない感覚である捨受の三種の感受作用のこと。

(231) 三苦：好ましくない対象から感じる苦しみである苦苦、世の移り変わりから感じる苦しみである行苦、好ましいものが壊れることから感じる苦しみである壊苦の三種の苦のこと。

『賢愚経』第一に云く、「当に智慧の利剣を以て汝等が結使⁽²³²⁾の病を断除すべし」⁽²³¹⁾。凡そ広く円密二宗経釈の誠文を勘うるに、断惑滅罪の教識一に非ず。且く『秘藏宝鑰』に云く、「下人天従り、上仏果に至るまで、皆な是れ断悪修善の感得する所なり」⁽²³⁴⁾。亦た吾が祖師上人大いに円密断惑の大意を得て、詳勘して曰く、「真言天台是れ頓と名づくとも難も、断惑証理するが故に猶お是れ漸教なり」⁽²³⁵⁾。若し実に言う所の如くならば、胎藏金剛経軌の中に正しく釈して、三妄の迷倒を尽くして四曼の内証を究意すと云うべからず。亦た本迹二門経釈の文に現に判じて、五住の煩惑を断じて二転の高果を証得すとも曰うべからざるなり。

問て曰く、粗ぼ其の誠文を聞かん、何如。答えて曰く、密教の誠証は、向きに往往之れを出すが如し。次に顕宗の所談に至りては、三惑同断⁽²³⁶⁾の所判、元品能治⁽²³⁷⁾の解釈等はれ其の誠証なり。学者自ら知れ。但し煩惱即菩提、生死即涅槃等の文に至りては、是れ則ち覚了の上の照見を語して、未だ必ずしも凡夫の行事を語わす。夫れ煩惱と菩提と、其の体無二と雖も、因人・果上の不同に由りて、

(232) 結使：衆生を迷いの世界に結びつける煩惱のこと。

(233) 『賢愚経』（正蔵四・三五〇中）。

(234) 空海『秘藏宝鑰』（正蔵七七・三六八中）。

(235) 法然『無量寿経釈』（『昭法全』六八）。

(236) 三惑同断：三惑（見思惑、塵沙惑、無明惑）が同じであること。

(237) 元品能治：もつとも根源的な無明（元品の無明）から悟りに至らしめること。

(238) 因人果上：因人は因位にある人、まだ仏にならない修行者のこと。果上は悟りの境地のこと。

其の用、大いに別なり。覺後の照了に約して之れを見れば、其の用悉く菩提なり。未悟の凡見に約して之れを言え、其の用、皆な迷法なり。譬えば牛は水を飲みて乳汁を出だし、蛇は水を服して毒氣を吐くが如し。『金剛頂經』に云く、

我、実に希有にして自性清淨なれども、愛染を以ての故に如来に奉事したてまつる。染を離れて清淨を得る者有りと雖も、能く染を以ての故に之れを調伏す^上。

『註金剛經』の序に云く、

金は山中に在れども、山、是れ宝なることを知らず。宝も亦た是れ山なることを知らず。何を以ての故に。性無きが為の故に。人は則ち性有りて其の宝を取りて用いて、金師に遇うことを得て、山を鑿鑿^{さんさく}し、破して鉢を取りて烹鍊^{ほうれん}して遂に精金と成じ、意に随いて使用して貧苦を免るることを得。四大身中の仏性も亦た爾なり。身を世界に喩え、人我を山に喩え、煩惱を鉢に喩え、仏性を金に喩え、智慧を工匠に喩え、精進勇猛を鑿鑿に喩う。身世界の中に人我の山有り。人我の山中に煩惱の鉢

(239) 出典未詳。円仁『金剛頂大教王經疏』(正藏六一・四九中)に同文あり。

(240) 出典未詳。慧能『金剛經解義』(正統藏二四・五一・七中)に同文あり。

(241) 鑿鑿…「鑿」はたがね、「鑿」はのみのこと。
(242) 烹鍊…恐らく「烹煉」。煎じる、煮出すこと。

有り。煩惱の鉢中に仏性の宝有り。仏性の宝中に智慧の工匠有り。智慧の工匠を用いて人我の山を鑿り破りて煩惱の鉢を見る。覺悟の火を以て、烹鍊するときは、自らの金剛の仏性を見ること了然として明淨なり。是の故に金剛を以て喩えと為して困りて之れが名と為す。空を解して行ぜざれば、名のみ有りて体無し。義を解して修行すれば、名体俱に備わる。修せざれば即ち凡夫、修すれば即ち聖者に同じ。故に金剛と名づく^上。

又た云く、

妄念生ずるときは則ち暗く、真智照らすときは則ち明なり。明なれば即ち煩惱生ぜず。暗ければ則ち六塵競い起こる^上。

又た『金剛般若』に云く、「若し菩薩に我相・人相・衆生相・寿者相有るは、即ち菩薩に非ず」^上。

『同註』に云く、

衆生と仏性と、本異なり有ること無し。四相有るに縁りて無余涅槃に入らず。四相有れば、即ち是れ衆生なり。四相無きは即ち是れ仏なり。迷うときは即ち仏も是れ衆生、悟るときは

(243) 出典未詳。慧能『金剛經解義』（卅統蔵二四五三中）に同文あり。

(244) 六塵：眼耳鼻舌身意の六境のこと。

(245) 羅什訳『金剛般若經』（正蔵八・七四九上）。

(246) 道川『金剛經註』（卅統二四・五三九下）。

即ち衆生も是れ仏なり。迷人は財宝有るを恃んで族姓(247)を學問し、一切の人を輕慢するを我相と名づく。仁義礼智信を行ふと雖も、而も意高ぶり、自負して普敬を行わず。我れ仁義礼智信を行ふことを解せり、爾れを敬べからずと言うを人相と名づく。好事は己に歸し、悪事は人に施すを衆生相と名づけ、境に對して取捨分別するを寿者相と名づく。是れを凡夫の四相と謂う。修行人も亦た四相有り。心に能所有りて、衆生を輕慢するを我相と名づく。自ら持戒を恃んで、破戒の者を輕んずるを人相と名づく。三途の苦を厭い、諸天に生ぜん願うは是れ衆生相なり。心に長年を愛このんで、福業を勤修し諸執を忘せざるは、是れ寿者相なり。四相有るは即ち是れ衆生なり。四相無きは即ち是れ佛なりなり上。

又た云く、(248)

即ち能く般若波羅蜜無相無著の行を行じて、我・人・衆生・寿者の四相無きことを了す。無我とは色受想行識無きなり。無人とは四大は不実にして終に地水火風に歸することを了す

(247) 族姓：富裕で權勢のある家柄に生まれた者。

(248) 道川『金剛經註』（正統蔵二四・五四二中）。

るなり。無衆生とは生滅の心無きなり。無寿とは我が身、本無なり。寧ろ寿者有らんや。四相既に亡すれば即ち法眼(249)明徹にして有無に著せず。二辺を遠離するは自心の如来なり。自悟自覚して永く塵勞妄念を離すれば、自然に福を得ること無辺なり(250)。

又た『金剛經』に云く、(251)

諸の微塵は如来、微塵に非ずと説きたまう。是れを微塵と名づく。如来、世界と説きたまうは世界に非ず。是れを世界と名づく(252)。

『同註』に云く、(253)

如来説きたまうところは、衆生の性中の妄念は三千大千世界の中の所有の微塵の如し。一切衆生は妄念の微塵の起滅、停(254)まらざるを被りて、仏性を遮蔽して解脱を得ず。若し能く念念真正にして般若波羅蜜無著無相の行を修すれば、妄念塵勞即ち清浄の法性なることを了す。妄念既に無し、即ち微塵に非ず、是れを微塵と名づく。真即ち妄なることを了し、妄即ち真なる

(249) 法眼：五眼の一つで諸法を觀察する智慧の眼のこと。

(250) 羅什訳『金剛般若經』（正藏八・七五〇上）、菩提流支訳『金剛般若經』（正藏八・七五四中）。

(251) 道川『金剛經註』（正統蔵二四・五四八中）。

ことを了すれば、真妄俱に泯ほろぼして別に法有ること無し。故に是れを微塵と名づくと云いたまう。性中に塵勞無きは即ち是れ仏世界なり。心中に勞有るは即ち是れ衆生世界なり。諸の妄念空寂なることを了するが故に、非世界と云う。

如來の法身を証得して普く塵利を見て応用無方なる、是れを世界と名づく上巳。

又た云く、「我人頓に尽き、妄想既に除きて言下に成仏す」上巳。『十住心論』第一に云く、

秘号を知る者は猶し麟角四の如く、自心に迷える者は既に牛毛四に似たり。是の故に大慈、此の無量乘を説きて一切智に入らしめたまう。若し堅に論ずれば則ち乘乘差別にして淺深あり。横に観ずれば則ち智智平等にして一味なり。悪平等の者は未得を得と為し、不同を同と為す。善差別の者は分満不二にして即離謬ほろぼらず。之れに迷える者は薬を以て命を夭ほろぼし、之れに達する者は薬に困りて仙を得。迷悟己れに在りて無執にして而も到る。有疾の菩薩、迷方の狂子、慎まずんばある

(252) 道川『金剛經註』（正統蔵二四・五四八下）。

(253) 空海『十住心論』（正蔵七七・三〇三下）。

(254) 麟角：麒麟の角のこと。きわめてまれな物事のたとえ。

(255) 牛毛：牛の毛のこと。きわめて多い物事のたとえ。

(256) 雷同：自分の考えを持たず、他人の意

べからず^巳。

衆文、雷同²⁵⁸して体用差殊の義を明かす。智人思扱せよ、智人思扱せよ。

抑^{そもそも}智者大師、予め今の問者の邪執を挫きたまえり。所謂る『摩訶止観』第二に云く、

『無行経』に云く、「食欲は即ち是れ道なり。恚癡も亦た是の如し。是の如きの三法の中に一切の仏法を具せり。若し人、貪欲を離して更に菩提を求むるは、譬えば天と地との如し。貪欲即菩提なり」。『浄名』に云く、「非道を行じて仏道を通達す。一切衆生即菩提の相なり。復た得べからず。即ち涅槃の相、復た滅すべからず。増上慢の者の為に姪怒癡を離るるを名づけて解脱なりと為すと説く。増上慢無き者には姪怒癡の性は即ち是れ解脱なりと説く。一切の塵勞は是れ如来の種なり」。山海色味、二無く別無し。即ち諸悪の不可思議の理を観^{至乃}ず。問う、上の三の三昧に皆な勧修有り。此れ何ぞ独り無き。答う、六蔽^{ろくへい}の非道は即ち解脱の道なり。鈍根障重の者、聞き已りて沈没す。若し

見にすぐに同意してしまうこと。

(257) 智額『摩訶止観』(正蔵四六・一八上)一九中。

(258) 六蔽：六波羅蜜を行ずるのに障りとなる、慳貪、破壊、瞋恚、懈怠、散乱、愚痴のこと。

更に勸修せば、旨を失すること逾甚しからん。淮河の北に大乘の空を行ずる人有り。禁無くして蛇を投る者なり。今当に之れを説かん。其の先師、善法に於て觀を作るに経ること久しくして徹せず。心を放いままにして悪法に向かいて觀を作るに少しの定心を獲て薄し空解を生ぜり。根縁を識らず、仏意に達せずして、純ら此の法を將て一向に他を教う。他を教うることに既に久しくして、或いは一兩、益を得る者に逢いぬ。虫の木を食んで偶、字を成すことを得るが如きを便ち以て証と為す。是の事、実なりと調うを余は妄語と為す。持戒修善の者を咲いて謂いて非道と言う。純ら諸人を教えて遍く諸悪を造らしむ。盲の眼無き者、是非を別たず。神根又た鈍く、煩惱復た重し。其の所説を聞くに、其の欲情に順ずれば皆な信伏随従して禁戒を放捨し、非として造らざること無く、罪、山岳と積む。遂に百姓をして之れを忽せにすること草の如くならしむ。国王・大臣、因りて仏法を滅す。毒氣深く入りて今に于て未だ改まらず。『史記』に云く、「周の末に被髮・袒身、礼度に依らざる者有り。遂に

- (259) 犬戎^{けんじゆう}、国を侵し絶えざること縊^{いしすじ}の如し。周姫漸く尽きぬ」。又た「阮籍^{げんせき}、逸才にして蓬頭散帶^{ほうとうさんたい}す。後に公卿の子孫、皆な之れを学^{なら}えり。奴に苟^{かり}にして相い辱しむる者は方に自然に達せりといひ、擗節^{せんせつ}兢持^{きやうぢ}する者は呼びて田舎と為す。是れを司馬氏の滅する相と為す」。宇文邕^{うぶんゆう}が毀廢せるも亦た元嵩^{げんすう}が魔業に由れり。此れ乃ち仏法滅するの妖怪なり。亦た是れ時代の妖怪なり。何ぞ随意の意に関らん。何を以ての故に。此の如きの愚人は心に慧解無くして、其の本師を信ず。又た前達を慕うて決して是れ道なりと謂^{おも}えり。又た情に順ずること易しと為して心を恣^{ほし}にし、楽を取りて迷いを改めず。譬^{たと}えば、西施^{せいし}、本心^{ほんしん}の病有りて多く嘸呻^{ふしん}を喜^{この}むに、百^もの媚^{めい}び皆な転じて更に美麗^まを益^ませり。隣女^{りんにょ}本より醜^{みにく}にして其の嘸呻^{ふしん}を学^{まな}うに憎むべきことが、弥劇^{いよげつ}し。貧しき者は遠く徙^{うつ}り、富める者は門を杜^とし、穴にすむ者は深く
- (260) 不絶如縊^{ふせつじゆう}：縊は綫の意。一本の糸のすじほどのこと。国が絶えずにわずかに
- 犬戎^{けんじゆう}：古代、中国の北西方に住んでいた異民族。周の幽王は、この犬戎に攻められて、紀元前七七一年に都を洛陽
- に移した。

- (261) 残ったことを表す。
- (262) 阮籍^{げんせき}：竹林の七賢の一人で老荘の学者。俗世間を厭い、礼法を無視した。白眼、青眼の故事で有名。
- (263) 蓬頭散帶^{ほうとうさんたい}：蓬^{よもぎ}のようにぼうぼうに伸びた頭で、着物が乱れているだらしない様。
- (264) 擗節^{せんせつ}兢持^{きやうぢ}：嚴格に礼節を重んじること。
- (265) 宇文邕^{うぶんゆう}：武帝のこと。北周第三代皇帝。仏教弾圧をしたことで知られる。
- (266) 元嵩^{げんすう}：南北朝時代の北周の人。初め僧でのち還俗。武帝に仏教が治国に害があることを説き、廢仏を起こさせるきっかけをなした。
- (267) 西施^{せいし}：春秋時代の越の美女。呉に敗れた越王から呉王夫差に献上され、寵愛を受けた。夫差が彼女の美しさにおぼれている間に呉は越に滅ぼされた。
- (268) 嘸呻^{ふしん}：顔をしかめてうめくこと。
- 譬^{たと}如^{ごと}西施^{せいし}：飛者高逝^{ひやうたか}：『莊子』「天運篇」にある故事の取意。形を真似るだけでなく、根本を理解すべきの意。

潜じ、飛ぶ者は高く逝くが如し。彼の諸人等も亦復た是れに似たり。狂狗、雷を逐うて地獄の業を造る。悲しいかな傷むべし。既に欲樂を嗜んで自ら止むこと能わず。猶し蒼蠅の唾の為に粘されて浪行の過ぐるが如し。其の事、略して爾なり。其の師の過をいわば根性に達せず、仏意を解せざるなり。仏の貪欲即是道と説きたまうことは、仏は機宜を見て、一種の衆生、底下薄福にして決して善の中に於て道を修すること能わず。若し其の罪に任せば流転已むこと無けんとならしめして、貪欲に於て止觀を修習せしむ。極めて止むことを得ず。故に此の説を作る。譬えば、父母の子の病を得るを見るに、余の藥に宜しからざれば、黄竜湯（湯）に須いて齒を鑿ちて之れを瀉ぐに、服し已りて病愈えたるが如し。仏も亦た是の如く、説、其の機に当たれり。快馬は鞭影を見て即ち正路に致る。貪欲即是道という仏意、此の如し。若し樂生有りて惡に於て止觀を修するに宜しからざれば、仏、諸善を説きて之れを名づけて道と為したまう。仏は二説を具したまえり。汝、今云何ぞ善を呵して惡に就く。若し其れ然らば

(269) 黄竜湯：漢方藥の一種。大黃湯とも言う。

汝は則ち仏に勝れり。公として仏前に於て灼然として違反す。復た次に時節に難起こり、王事に拘られて善を修することを得ざれば、悪の中に於て止観を習わしむ。汝、今難も無く拘も無し。何意ぞ純ら乳葉を用いて他の慧命を毒る。至乃仏法を破壊し、威光を損失し、悞りて来生を累わす、大悪知識なり。仏意を得ざる其の過、是の如し。復た次に夷嶮の両路、皆な能く通ずること有れども、難の為に嶮に従う。善悪俱に通ずれども機を審かにして蔽に入るべし。汝、善を棄てて悪を専らにして能く非道に通達せば、何ぞ水火を蹈躡し山壁を穿踰せざる。世間の嶮路すら尚お通ずること能わず。何に況んや悪を行じて而も正道に会すること、豈に得べけんや。至乃復た次に其の悪行の事を撿ずるに即ち偏邪なり。汝、食欲即是道なりと謂いて一切の女を陵ず。而れども瞋恚即是道なりといて、一切の男を害すること能わず。唯だ細滑の触を愛して是れ道なりといて打拍苦渋の触を畏れて、則ち道有ること無しという。一を行じ、一を行ぜず。一は道有り、一は道無し。癡闇なること漆の如し。偏に汚損を

(272) (271) (270)
夷嶮両路：平らな道と険しい道のこと。
蹈躡：踏み越えること。
穿踰：壁を壊しのり越えること。

行ず。譬えば、死屍の好花園を穢すが如し云云。其の偏行を難ずること前の如し。或いは水火刀杖を將いて之れに向かえば、其れ即ち黙然たり。或いは答えて曰く、而も汝、我れ常に能く入ると見ずや。此れ乃ち心に違える無慙愧の語なり。亦た六即の意を得ず。所以に此れを説くことを須ゆる者は、上の三行法は勲策難ければ、宜しく勸修すべし。随自意は光を和して悪に入る。一往則ち易ければ宜しく誠忌すべし。大黃湯を服するが如く、応に白飯を備えて之れを補止す上巳べし。

『輔行』に之れを受けて曰く、

淮河わいより下るは師に自行の失有ることを明かす。淮北河北の邪空の人、濫みだりに大乘と称して悪に入りて観無し。故に禁無くして蛇を捉うるを以て之れに喩う。禁とは制なり。術法、物を制する故なり。貪欲は蛇の如く、観法は禁の如し。観を以て欲を観れば蛇を捉うるが如し。不善の四句、禁無きが如し。至乃仏は、但だ欲は火の如く、蛇の如く、毒の加しと言いたまえり。至乃今観法無くして悪に入るも亦た爾なり。悪障えずと言いて、かえ反りて

(273) 湛然『止観輔行伝弘決』（正蔵四六・二一〇七）。

(274) 淮河：中国の川。長さは長江、黄河に決ぐ。黄河と長江の間を東西に流れており、この川が華北と華南の境界線ともされる。

悪の為に害せらる。若し妙観の杖を以て六塵の林に入りて、貪欲の蛇に遇いて四運(275)の頭を按し、観を以て項(うなじ)を捉うるに、毒害至りて身業を成ずるに、清淨常住の法身を失わしめず。彼の『阿梨』とは、正観の杖無くして但だ貪欲障えずと説けり。義、稍(やや)同じからんと欲す。故に借りて此れに喩う(上)。

『往生要集』上に云く、

問う、煩惱菩提、若し一体ならば、唯だ応(こころ)に意に任せて惑業を起こすべしや。答う、是の如き解を生ずるを、之れを名づけて悪取空(あくしゆくう)の者と為す。専ら仏弟子に非ず。今反質(ほんぜつ)して云く、汝、若し煩惱即菩提なるが故に欣いて煩惱悪業を起こさば、亦た応に生死即涅槃なるが故に欣いて生死の猛苦を受くべし。何が故ぞ、刹那の苦果に於ては猶お堪え難きを厭い、永劫の苦因に於ては自ら恣(ほしまま)に作らんことを欣わん。是の故に当に知るべし。煩惱と菩提とは体是れ一なりと雖も、時用異(じゆうい)なるが故に染淨不同なり。水と氷との如く、亦た種と菓との如く、其の体是れ一なれども時に随いて用異なり。此れに由

(275) 四運：四運心の略。人の観念が起る四つの過程（未念、欲念、正念、念已）のこと。

(276) 阿梨：『中阿含経』五四・『大品阿梨吒経』（正蔵一・七六三上～七六六中）のこと。

(277) 源信『往生要集』（正蔵八四・四九中～下）。

(278) 悪取空：空の意味を誤って理解して、執着すること。

(279) 反質：質問に対して逆に問い返すこと。

りて道を修する者は本有仏性を顕わし、道を修せざる者は終に理を顕わすこと無し。『湿染経』の三十二に云うが如し。「善男子、若し人有りて是の種子の中に果有りや、果無しやと問わば、応に定んで答えて言うべし。亦たは有り、亦たは無しと。何を以ての故に。子を離れて之の外に果を生ずること能わず。是の故に子有りと名づく。未だ芽を出さず。是の故に無しと名づく。是の義を以ての故に、亦たは有り、亦たは無し。所以は何ん。時節異有れども、其の体是れ一なり。衆生の仏性も亦復た是の如し。若し衆生の中に仏性有りと言わば、是の義然らず。何を以ての故に。衆生は即ち仏性、仏性は即ち衆生なり。直だ時の異を以て、浄と不浄と有るなり。善男子、若し問うて是の子は能く果を生ずるや不や。是の果は能く子をみを生ずるや不やと言うこと有らば、応に定んで答えて言うべし。亦たは生じ、生ぜずと」^{上段}。

又た同中に云く、^{下段}

今三の通の治を加えば、一には能く惑の起るを了して、其の心を驚覚す。煩惱を阿責すること悪賊を驅かるが如くすべし。三業を防護すること油鉢を撃ぐるが如くせよ。『六波羅蜜經』に云うが如く、結加趺坐して正念に觀察して、大悲心を以て而も屋宅と為し、智慧を鼓と為し、覺悟の杖を以て而して之れを扣き撃ち、諸の煩惱に告げよ。「汝等、当に知るべし。諸の煩惱の賊は妄想より生ず。我が法王の家に善事起ること有り。汝が所為にあらず。汝宜しく速かに出づべし。若し時に出でずんば、当に汝が命を断つべし」。是の如く告げ已るに、諸の煩惱の賊すなわ尋ち自ら散滅せん。次に自身に於て、善く防護を起して、放逸すべからずと。又た『菩薩処胎經』の偈に云く、「彼の犯罪の人の、鉢に満てる油を撃げ持ちて、若し油を棄つること一滯もすれば、罪大僻(281)に交り入らん。左右に伎樂を作すとも、死を懼れて顧視(282)せざるが如し。菩薩の淨觀を修するに、執意金剛の如くし、毀誉及び悩乱するに、

(281) 大僻…重い刑罰のこと。
(282) 顧視…かえりみることに。

心意傾動せず、空にして本より来た浄にして、彼此の中間も無しと解る」と。二には、通じて四句を用いて、一切の煩惱の根源を推求せよ。謂く、此の煩惱は心に由りて生ずとや為ん、縁に由りて生ずとや為ん、共して生ずとや為ん、離して生ずとや為ん。若し心に由りて生ずといわば、更に縁を待たずして、或いは龜毛・兎角(283)に於て、貪臟を生ずべし。若し縁に由りて生ずといわば、心を用いざるべし。或いは眠人をして煩惱を生ぜしむべし。若し共して生ずといわば、未だ共せざるとき各々無く、共せる時に安んぞ有らん。譬えば二の沙合すと雖も、油無きが如し。或いは心境俱に合するに、那なんぞ煩惱を生ぜざる時有らん。若し離して生ずといわば、既に心を離れ縁を離る。那なんぞ忽ち煩惱を生ぜん。或いは虚空の二を離れたる、応に煩惱を生ずべし。種種觀察するに、既に実の生無し。従りて来る所無く、亦た去る所無し。内に非ず、外に非ず、亦た中間に非ず、都て処所無し。皆幻の如くして有なり。唯だ惑心のみ非ず、觀心も亦た爾なり。是の如く惑心を推求するに自ら滅す。故に『心地觀經』の偈に云

(283) 龜毛兎角…この世に存在しない物事のたとえ。

(284) 体性：実体と本性のこと。

く、「是の如きの心法は本より有に非ざれども、凡夫執迷して無に非ずと謂おもえり。若し能く心の体性たいせいの空なるを觀かんずれば、惑障生ぜずして便ち解脱す」と。又た『中論』第一の偈に云く、「諸法は自よりも生ぜず、亦た他従りも生ぜず、共ならず、無因にあらず、是の故に知んぬ、無生なりということを」。応に此の偈に依りて、多の四句を用ゆべし。三には念ねんずべし。「今、我が惑心に具足せる八万四千の塵勞門と、彼の弥陀仏の具足したまえる八万四千の波羅蜜門と、本来空寂にして、一体無礙なり。貪欲即ち是れ道なり。患癡も亦た是の如し。氷と水との性の異処に非ざるが如し。故に經に云く、「煩惱と菩提と体無二なり。生死と涅槃と異処に非ず」云々。我れ今、未だ智火の分有らず。故に煩惱の氷を解いて、功德の水と成すこと能わず。願わくは仏、我を哀愍して、其の所得の法の如くし、定慧の力莊嚴せる、此れを以て解脱せしめたまえ」と。是の如く念ねんじ已りて、声を挙げて念仏して而して救護を請え。『止觀』に云うが如く、「人の重きを引くに、自力にて前すまずんば、傍の救助を仮りて、則ち軽く

挙ぐることを蒙るが如し。行人も亦た爾なり。心弱くして障りを排うこと能わずんば、名を称して護を請うに、悪縁壞すること能わず」⁽²⁸⁵⁾。若し惑、心を覆うて、通別の対治を修することを欲せしめずんば、須く其の意を知りて、常に心の師と為りて、心を師とせざるべし。

然るに今、弥陀覚王は瓦礫変金の宏誓を立てたまう。我等庸輩、厭悪塵埃の懇情を発す。故に千即到千化、万即万変の勝利有る者なり。豈に夫の非情変化の事に同じからんや。智人自量せよ。夫れ戒定慧の三学は即ち行者三業の修行なり。調く持戒は身口の勤め、定慧は意業の行なり。

然るに本願の文を見るに「至心信樂欲生我国」とは、是れ意識の所作なりと雖も、只だ是れ厭欣安心にして全く定慧に非ず。「乃至十念」とは、身日の行業なりと雖も、亦た即ち語業称名にして更に戒行にあらず。卓拔高識の学者、自ら思忖すべし。又た黒谷尊師云く、⁽²⁸⁶⁾

若し智慧高才を以て本願と為したまわば、愚鈍下智の者は定ん

(285) 庸輩：凡庸なやからのこと。

(286) 法然『選択集』（正蔵八三・五下～六上、『浄土宗聖典』三・二六）。

で往生の望を絶たん。然るに智慧の者は少く愚癡の者は甚だ多し。若し多聞多見を以て本願と為したまわば少聞少見の輩は定んで往生の望を絶ん。然るに多聞の者は少く、少聞の者は甚だ多し。若し持戒持律を以て本願と為したまわば、破戒無戒の人は定んで往生の望を絶たん。然るに持戒の者は少く、破戒の者は甚だ多し。自余の諸行も之れに準じて応に知るべし。当に知るべし、上の諸行等を以て本願と為したまわば、則ち往生を得る者は少く往生せざる者は甚だ多からん。然れば則ち弥陀如来、法蔵比丘の昔、平等の慈悲に催されて普く一切を撰せんが為に、造像起塔等の諸行を以て往生の本願と為したまわず、唯だ称名念仏の一行を以て其の本願と為したえるなり云。

夫れ行者等、設い縁事縁理の誓心無しと雖も、唯だ本願仰頼の信を以て、以て其の要心と為し、設い六度十到(287)の妙行無しと雖も、只だ持名称念の勤を以て、以って去行と為ば、水月の昇降決定して顕現すべし。是れ則ち別願の感応なり。焉んぞ思議すべけん。

又た迎才『浄土論』(288)に二道の修行を励まさんと欲して、先ず三

(287) 六度十到：六度は六波羅蜜、十到は十到彼岸、つまり十波羅蜜を指す。

(288) 迎才『浄土論』(浄土六・六六四下一〜九、正蔵四七・一〇〇下〜一〇一上)。

学の有無を測量すべきの義を釈して云く、

『經』に云く「若し能く至心に阿弥陀仏を念ずれば、一一の念の中に八十億劫の生死の重罪を滅す」と。今既に時に約し根に約するに、行者定慧の分無き者は唯だ須らく専ら阿弥陀仏を念じて浄土に生ぜんと求むべし。此を要路と為すなり。若し自ら定慧の分有りと知らば、則ち此方に於いて道を修し無上菩提を求めよ。若し自ら定慧の分無しと知らば、則ち須らく浄土の行を修し浄土の中に就きて無上菩提を求むべし。故に『智度論』に云く「行者阿毘跋致を求むるに二種に道有り、一には難行道、二には易行道、水陸兩路の如し。此方にて道を修すれば則ち難く猶し陸路のごとし。浄土に生じて道を修するは則ち易し、猶し水路のごとし」^{上。目。}

又た慧浄師の『阿弥陀經義述』に云く、⁽²⁸⁹⁾

一たび彼土に生ずれば横に五道を截り三界を超出して不退転に至る。初僧祇万劫の修行に当たれり。『十住毘婆沙論』に云く「修道に二有り。一には難行、二には易行。此土の修道を名

(289) 慧浄師『阿弥陀經義述』(正藏三七・三〇九七)。

づけて難行といい、西方の修道を名づけて易行という。跛あしなえたる人の陸路を歩行するに即ち苦しく、跛たる人の水路に乗船するに即ち樂しきが如し。

又大智律師の『觀經義疏』に云く、

第二攝教分齊に三有り。初には二土立教の純雜を明かし、二いは大小漸頓を弁じ、三には了不了義を簡ぶ。初に二土立教純雜を明かすに、釈迦一化所説の經教に大途二有り。一には娑婆入道の教觀、二には淨土往生の教觀なり。初の中に娑婆の五濁には惑業に、重輕あり、根性に差別あり。機に在りて既に雜なれば數も亦た純ならず。故に大小科殊しなに、偏円轍異あつとなること有り。經論の宗師、古今の判教、互いに不同ありて迭たがひに相い廢立す。廣くは他文に在り。備に叙ぶべからず。

戒度『正觀記』に之れを受けて曰く、

問う、疏主両土の教法に純雜の異有ることを区分するは、前古にも未だ聞かず。達士は適從せざる無し。小智は尚お輕諂を生ず。典拠有りとや為ん、臆裁より出ずるとや為ん。試みに

(290) 元照『觀無量壽經義疏』(正藏三七・二七九下〜二八〇上)。

(291) 戒度『正觀記』(淨全五・四四一上〜下)。

請う、申べ通じて永く疑惑を祛さげよ。答う、疏を造り、經を通じ、言を立てて教を判ずること苟くも正量無くんば、安ぞ敢て心を師とせん。独り功無きのみにあらず。反りて伊の戚を貽す。但だ義、群編に蘊して、名、今疏に出でたり。無文有義は智者之れを用う。今、為に委しく陳べん。庶こいねがわ幾くは一たび悟れ。故に天台の『十疑論』に自力他力を明かせり。自力とは此士の修道なり。卒つひに未だ成ずることを得ず。他力とは若し弥陀を信ずれば大悲願力摂取して捨てず。即ち往生を得るなり。復た『十住婆沙論』の難易二道を引きて云く、「難行道とは此の五濁惡世に在りて無量の仏の所みちにて菩提の道を求む。是れを甚難と為す。云々。易行道とは調く、仏語を信じて念仏三昧を修すれば仏力摂持して即ち往生を得。云々。」準知するに、自力難行道は此土入道の教にあらずや。他力易行道は浄土入道の教にあらずや。又た善導の『玄義』の如きは專雜二修を以て両土の進道の不同を分てり。瑛師の『修証議』の中には、乃ち此方の破惑証真と西方浄土に生ぜんと求むるとの説有り。疏主、深く仏意を得、仰ぎて先賢を

則とす。故に茲の高判独り古今に抜く。四海をして咸く規とし、万載不易ならしむべし^{上巳}。

請い問う。曰く、三句とは『金剛般若』に云く、⁽²⁹³⁾如来、一切の法は皆な是れ仏法なりと説きたまう。須菩提、言う所の一切法とは即ち一切の法に非ず。是の故に一切法と名づく^{上巳}。

六祖能大師之れに註して曰く、

能く諸法に於て心に取捨無く、亦た能所無ければ熾然として一切法を建立すれども而も心常に空寂なり。故に知んぬ。一切法は皆な是れ仏法なることを。迷者の一切法に食著して、以て仏法なりと為ることを恐れたまいて、此の病を遣らんが為に故らに即ち一切法に非ずと言うなり。心に能所無く、寂にして常に照せば定慧齊しく行じ、体用一致なり。是の故に一切法と名づくといえり^{上巳}。

又た同経に云く、「言う所の善法とは、如来善法に非ずと説きたまう。是れを善法と名づく」⁽²⁹⁴⁾と。同註に云く、⁽²⁹⁵⁾

一切の善法を修するに果報を希望せば即ち善法に非ず。六度

(292) 『金剛般若経』(『正藏』八・七五一中、七五五中)。

(293) 慧能『金剛経解義』(『正統藏』二四・五二八中)。

(294) 『金剛般若経』(『正藏』八・七五六上)。

(295) 慧能『金剛経解義』(『正統藏』二四・五三〇中)。

万行熾然として俱に作せども、心に報を望まず。是れを善法と名づく^上と。

又た同経に曰く「如来、諸相具足と説きたまうは即ち具足に非ず。是れを諸相具足と名づく^上。同註に云く、

如来とは即ち無相法身是れなり。肉眼の所見に非ず。慧眼乃ち能く之れを見る。慧眼未だ具足を明らめず。我人等の相を生じて以て三十二相を觀じて如来と為るは、即ち名づけて具足と為さず。慧眼明徹にして我人等の相生ぜず。正智の光明常に照らす。是れを諸相具足と名づく。三毒未だ泯^{ほろぼ}さずして、如来の真身を見ると言わば、固^{まこと}に比^{しやうひ}の理無し。縦い能く見る者も祇^ただ是れ化身なり。眞実無相の法身には非^ず上と。

夫れ『金剛般若』の一部始終、皆な此の如く三句法門を説きて、以て一切衆生の迷執を遣撥す。学者致迷すること勿^{そと}れ。抑^{おさ}仁者、正しく是れ第一句の域内に居れり。然而又た頻りに第三句の方外に出でたりと匂^{くさ}じること、若しは夫れ大妄語か。若しは又た増上慢か。二つ俱に言うに足らざるのみ。於^あ怖^{おそ}しきかな。三逆の

(296) 『金剛般若經』(正藏八・七五一下)。
(297) 慧能『金剛經解義』(正統藏二四・五二九下)。
(298) 匂…大きな声でさわぐこと、わめくこと。

大授が再来せるか。四禪苾芻が未だ死せざるか。其れ如何。慎むべし、慎むべし。且く応理円成宗⁽³⁰⁰⁾に依りて之れを言わば、智純觀達すれば煩惱即ち息す。是れを名づけて寂と為す。煩惱若し寂すれば、妙智爰に顕るるを即ち菩提と言うなり。全く煩惱の体即ち菩提なりと謂うには非ず。此の義大いに性宗⁽³⁰¹⁾に明かす所の惑智一体の義には異なり。若し又た之れに依りて之れを觀れば、難者の所存、^{いよいよ}弥邪見の深坑に墮すのみ。

次に「教道は断と云い証道は断とせず⁽³⁰²⁾」⁽³⁰³⁾と言うは、凡そ断道の次第に於て大いに分かちて二有り。一には曰く対治断、二には曰く体達断なり。対治断は是れ偏に三行者の所用なり。所謂る實に煩惱の迷闇を断破して、以て智慧の光用⁽³⁰⁴⁾を耀かす。体達断は廻ち円頓行人の所用なり。所謂る迷悟相即惑体一と体達して、煩惱の体性を失せざるなり。然れば則ち円融実教の意は、是れ体達断にして対治断に非ずと。而して「教道は断と云い証道は断とせず⁽³⁰⁵⁾」⁽³⁰⁶⁾とは言うなり。学者混淆すること莫れ。問者之れを聞きて忽ち翻邪向正するのみ。

(299) 大：頭注に「天」の誤りかとある。

(300) 応理円成宗：相宗のこと。現象的な変化差別相対のすがたを課題の中心とする宗旨。具体的には俱舍宗や法相宗など。

(301) 性宗：不変平等絶対真實の本体や道理を課題の中心とする宗旨。具体的には華嚴宗や三論宗など。

(302) 湛然『止観輔行伝弘決』（正藏四六・二四八中）。

(303) 用：頭注に「明」の誤りかとある。

抑おそ若もし復もとた人有ありて念ねん仏ぶつを捨すてて勤きん修しゆせざるは、貧ひん人の衣い裏らの明珠めいしゆを忘れ、力士りきすの類るい上の宝珠ほうしゆを忘れたるが如ごとし。若もし又またた人有ありて本願ほんがんに歸かへして尊号そんごうを持つは、窮女きゆうにょの最上さいじやうの勝金しやうきんを得、渴者かつしやの清浄しやうじやうの冷水れいすゐに値あへるに似にたり。行者ぎやうじや自量じりやうせよ。又またた聖道修行しやうだうしゆぎやうを致いたすの人は、無輶むぎの車くるまに乗のりて去さるが如ごとし。浄土じやうど往生じやうじやうを求もとむるの彙ゑいいは、牢副らうふの輅らに乗のりて往いくに似にたり。二車にじや運轉うんてんの優劣ゆうりやく其そのれ何如なにごとぞや。

問とて曰いく、縦たい三学さんがく無分むぶんの衆生しゆじやうと雖なも、若もし六字りくじ尊号そんごうの妙行めうぎやうを持もてば、必かなず苦海くかいの愛波あいばを超こえて、速すみやかに楽邦らくぱうの彼岸ひがんに至いたるといふこと、諦たらかに其そのの義理ぎりを聴きき、諦たらかに其そのの文証もんしやうを聞ききつ。行体ぎやうたいに於おて最さいも然しからんか。但たし若もしは厭欣えんきんの用心うしん、若もしは起行きぎやうの意業いごう、夫そのの禹王うゑん、洪波かうぱを治ちせしの思しい、燕丹えんたん、白鷗はくおうを得えたる志しの若もくに匪ひざる自みづかりは往生じやうじやうを得えべからずとならば、我われれ等ら、庸輩ようばい散漫濁乱さんまんじやくらんの異生いじやう、定じやうんで西方しやうぱう即詣じやくぎの舐なを絶たたん者ものか、何如なにごとん。
答こたえて曰いく、夫そのれ持名ぢみやうの行者ぎやうじや、二種にしゆの用心うしん、縦たい君子くんにしの交まわりの似如しごとに相あい似にて醇あつからずと雖なも、直ちちに西刹しやくを求もとめ余あの九域くじやく

(304) 無輶之車：油を注していない車のこと。進むためには困難な乗り物として、ここでは聖道修行の例えに用いられている。

(305) 牢副之輅：牢固にして立派な車のこと。困難なく進める乗り物として、ここでは往生浄土を求める行の例えに用いられている。

(306) 禹王：中国古代の伝説的な帝（紀元前一二七〇年頃）で夏朝の創始者。

(307) 燕丹：燕の太子である丹（紀元前二二六年）のことで、古代中国の戦国時代末期の燕の王族。

(308) 白鷗：白いカラスのこと。燕丹が秦王（後の始皇帝）に人質として捕らわれたときに、故郷に残した母に会いたいと帰国の願いを出したところ、秦王はカラスの頭が白くなり、馬に角が生えたら、故国に帰してやろうと嘲笑ったが、燕丹の必死の祈りが通じて、そのありえないはずのことが起こり、やむなく燕丹を故国に帰したという故事がある。

(309) 庸輩：平凡なやからのこと。

を捨てて、独り称名を勤めて万行に涉らずんば、籠鳥騰空の時、聖衆来迎の靈粧を拝し、胞胎逃逝(311)の刻、蕭瑟琴筑(312)の音楽を聞かんと必せり。仁者(313)聞かざるや、彼の裴旻(314)が真虎に逢い、葉公(315)が真竜を感ぜしことを。是れ其の二子は便ち仮を行じて而も真を得たるの彙いなり。若し爾らば、行者等、用心の浅薄に泥じて、順次の往生を疑うこと莫れ。若し修道の人有りて、念仏を捨てて余行を勤めんと欲せば、奚んぞ金鏢(316)を以て鍬鏢(317)に易え、錦襪(318)を以て褐(319)に易うるに異ならんや。智人、自ら商量すべし。噫乎、夷斉(320)が大賢なりしも、猶お獄卒の為に打たれ、孟鳥(321)が風のごとく走りしも、又た阿防(322)の為に追われたり。夫れ尊号の利劍は十纏(323)の太索(324)を截るべく、念仏の洪波は七支(325)の塵垢を洗うべし。南無阿弥陀仏。

浄土十勝箋節論卷上

乾上終

- (310) 籠鳥騰空：籠に入れられて自由を奪われていた鳥が、空に放たれ昇つてゆくこと。
 (311) 胞胎逃逝：胞胎は胎児を覆う肉膜。四生のうちの胎生から逃れ、輪廻を脱すること。

- (312) 蕭瑟琴筑：蕭は竹管を使った気鳴楽器、瑟は多数の弦をもつ大型の楽器、琴は七弦を張った楽器、筑は竹製の胴に五弦を張った楽器のこと。

- (313) 裴旻：盛唐の頃の武官で剣舞の名手。腕試しに虎退治を行ったが、本物の虎に出会って立ちすくんでしまい、二度と狩獵をしなかったという故事がある。
 (314) 葉公：楚の重臣。竜を好んだが口先だけの愛好であって、本物の竜に出会ってみると恐れおののいてしまったという葉公好竜なる故事がある。
 (315) 金鏢：金と銀（しろがね）のこと。
 (316) 鍬鏢：銅と錫のこと。
 (317) 錦襪：美しい衣のこと。
 (318) 褐：そまつな着物のこと。
 (319) 夷斉：伯夷と叔斉のこと。殷代末期の孤竹国の王子の兄弟で高名な隠者。儒教では聖人とされる。
 (320) 孟鳥：大きく猛々しい鳥のこと。
 (321) 阿防：地獄の獄卒のことで、牛の頭に、胴と手は人、脚は牛に似ている。
 (322) 十纏：十種の煩惱。ここでは十悪を指すか。
 (323) 太索：太い縄のこと。
 (324) 七支：身業の三つの煩惱（殺生・偷盗・邪淫）と、口業の四つの煩惱（妄言・綺言・悪口・両舌）のこと。